

戦後ドイツにおける歴史認識の変遷：アイデンティティーの問題と教科書記述をめぐって

著者	柳原 初樹
雑誌名	言語と文化
巻	8
ページ	125-168
発行年	2004-03-15
URL	http://doi.org/10.14990/00000399

戦後ドイツにおける歴史認識の変遷

—— アイデンティティーの問題と教科書記述をめぐって ——

柳 原 初 樹

「現在の創生の前には26回の試みがあったが、そのすべては失敗する運命にあった。人間の世界は先行する残骸の混沌とした中心から生じてきた。そして人間もまた、失敗して無に帰する危険にさらされている。世界を作るとき神は『うまくいくように希望しよう (Halway Sheyamod)』と叫んだ。そしてこの希望は、引き続く世界と人類の歴史すべてに伴ってきたが、最初から、この歴史が根本的な不確実性の烙印を押されていることを強調していたのである。」

イリヤ・プリゴジン『混沌からの秩序』¹⁾

序)

2003年度11月におけるドイツで最大の国内政治的関心はCDU（キリスト教民主同盟）のホーマン議員の党及び会派除名事件並びにこの議員の演説にエールを贈った、現役国防軍准将の更迭事件であった。その背景となっているのはホーマン議員が10月3日のドイツ統一記念日に選挙区で行った演説の内容であった。その柱となっていたのは、ロシア赤色革命におけるユダヤ人の指導層の存在の指摘、彼らが階級闘争において大量の階級の敵を粛清したとの主張、そして「ユダヤ人も手を汚す行為を行った民族 (Tätervolk) であった」²⁾ という結論であった。

彼のこの演説は国内でマスコミの砲火を浴びるまで選挙区のCDUのホームページにも掲載されていた。「ホーマンはナチスの犯罪を相対化し、弱めるために第三者を利用したことは党の認識と相容れない」という理由に基づいて、党首メルケルはホーマンを除名したが、彼の除名決議には少なからざる反対票と棄権票の存在があったことは、この国における過去の認識が現在も揺らいでいることの証左であり、「過ぎ去ろうとしない過去」を過ぎ去させたいと望む意識や、「普通の歴史」を浸透させたいと望む意識が一部の政治家の脳裏に今も強烈に存在していることを物語っている。

その点に関しては、多くの研究者が指摘するように、1982年の政権交代とともにドイツの歴史家や社会に修正主義的傾向、新保守主義的傾向が浸透しはじめたことは否定できない。そうした修正主義者達、相対主義者達と主として社会哲学者ハーバーマスとの論争が1986年から翌年にかけて新聞紙上で展開された「歴史家論争」であったが、その時の論争の発端となったのはベルリン大学歴史学の教授エルンスト・ノルテの主張であった。しかし、ノルテの主張「アウシュビッツの唯一無比性の否定とスターリンとヒットラーとの比

較」を手がかりとする「悪の相対化」はドイツ統一後、一部の修正主義者によってノルテすら考えつかなかったような相対化をも生み出した。つまり、東ドイツのシュタージとゲシュタポとの比較、コソボ内戦の民族浄化との比較による相対化がその活例である。この「歴史家論争」において確認された認識、すなわち「アウシュビッツは理解の及ばぬ人跡未踏の地であり、解明のブラック・ボックスであり、歴史上の意味付けの試みをすべて飲み込んでしまい、歴史外的な意味を帯びた真空地帯である」³⁾との認識を希薄にしようという発言が再び活発化しはじめたのである。⁴⁾

今回のホーマン議員の問題もこのようなコンテキストで考えなければ、我が国に頻繁に起こる政治的スキャンダル発言の場合のように一過性のものとして片付けられてしまう危険がある。我々が問わねばならないのは、ドイツでは或る中堅議員の歴史をめぐる発言が、議員の政治生命を殆ど絶つまでに致命的なものになるのは何故なのか、歴史に関する失言が所属政党の「文化的ヘゲモニー」の喪失を引き起こしかねないのは何故なのか、ひいてはこの発言が戦後形成されてきたドイツ連邦共和国の公式見解に基づく政党の歴史政策とどのような差異を生じさせたのか、その原因と意図は何であるか、これらの問題こそ我々の焦眉の関心とせねばならない。

「歴史を心に刻み胸中に抱いていることは、つねにドイツの現実政治の本質的な構成部分でありつづけてきました」⁵⁾と、ヴァイツゼッカー元大統領は自叙伝で語っているが、ナチズムに関する「過去の解釈基準」ないし「基本解釈」が、戦後ドイツの「政治文化」を規定してきたことは否定できないし、国民が政党の歴史認識を判断するバロメーターとなっていたことも事実である。⁶⁾「歴史家論争」においても今回のホーマン発言においても、ナチスの犯罪そのものは否定されていない。問題は第三者との比較によるその相対化にあった。戦争犯罪の存在そのものを認めない、一部の右翼政治家が与党に存在する日本とは事情が異なっている。ドイツでは戦後、ナチスの犯罪をめぐる隣国フランスやポーランド、さらにはイスラエルとの二国間対話、冷戦後は歴史記述に関し、欧州内での多国間対話が行われた。20世紀の終わりにはアメリカで起こされたドイツ企業に対する戦時中の強制労働に対する集団賠償訴訟を、クリントン政権と緊密に協議して、賠償基金を設立することによって回避した。そこには、自国の犯罪を認めた上での、政治的・外交的・学術的交渉の展開が看取される。日本では犯罪の程度と性質が異なるにしろ、こうした方法で責任を引き受け交渉に臨むという、政治的な意思の欠落がドイツとは対照的である。

ナチズムをめぐるドイツ国内外の哲学、社会哲学、歴史学の膨大な研究、1968年の学生紛争、ゲオルク・エックハート研究所の国際歴史教科書対話への努力などの何十年にもわたる過去との取り組みは、過去の犯罪を認める世論形成によって、ドイツの政党の歴史に関する認識や発言にも大きな影響を与えてきたし、「ナチズムの唯一無比の犯罪」の認識に関しては政党間で超党派的コンセンサスが得られていたはずであった。ハーバーマスも「歴史家論争」の最中の1987年時点ではこのような公式の自己了解が戦後のドイツ連邦共和国には存

在していたと語っていた。それはホイス大統領からハイネマン大統領、ワイツゼッカー大統領にいたるまで継続してきた認識であった、と述べている。ハーバーマスはさらにこう続けている。

アウシュビッツ以降、我々がナショナルな自己意識を汲み出しうるのは、我々のより良き伝統、それも鵜呑みにせず批判的に獲得した歴史の中の「歴史から選び取った」より良き伝統からのみである、ということである。ナショナルな生活のありかたが人間の共同生活の基盤を比較不可能なまでに破壊することを許してしまった以上は、その生活様式を継承していくにあたっては、道徳的破局によって学んだ、疑い深い視線に耐えられるような伝統の光にあてる以外にはない。そうしなければ、我々は自分自身を尊敬することもできなければ、他者からも尊敬されることを期待できないであろう。このような前提がドイツ連邦共和国の公式の自己了解を支えてきた。⁷⁾

けれども同時にハーバーマスはこうも警告している。

ところがこのコンセンサスが現在右の側から無効とされつつある⁸⁾

ハーバーマスが強く警鐘を鳴らしたのは「公共の場における歴史の使用」の自国中心的傾向、すなわちナショナリズムへの傾斜なのである。または歴史の桎梏から解放され自分達のアイデンティティーを担うような「国民の物語」創造への誘惑なのである。ホーマン議員の発言にもそのような意図が含まれており、17年前にノルテが語った「過ぎ去ろうとしない過去」への修正主義的挑発を意味するものであった。

本稿ではこのようなドイツ人の過去との取り組みと自国の歴史認識の変遷を以下のような観点から考察したく思う。

- I) 戦後責任をめぐる日本とドイツの共通点と相違
- II) 戦後ドイツにおけるキリスト教が基本法と政治に与えた影響
- III) 日独の知識人たちの罪責に関する発言：ヤスパースの罪責論、亀井勝一郎の「戦争と自己」
- IV) 歴史の意味とアイデンティティーをめぐる：歴史家論争とその背景
- V) 国際歴史教科書対話
- VI) 戦争責任を巡る多国間対話の意義

I) 戦後責任をめぐる日本とドイツの共通点と相違

日本とドイツの戦争責任、戦後責任に述べるにあたっては先ず、両国の責任に関して比較できるものと比較できないものを明確にしておくべき必要がある。なぜなら、戦後西ドイ

ツ、そして統一後のドイツ連邦共和国の戦後責任の取り方、賠償制度、ナチス犯罪の時効の破棄、ビリー・ブランドやヴァイツゼッカー元大統領に代表される政治家の発言を取り上げて、ドイツの戦後責任の取り方や見識が日本より遥かに優れていると早急に判断することには、多くの問題を看過する危険が伴うからである。それは、日本の戦争責任を認めることを否定し、この責任への告白を東京裁判史観や自虐史観、ないしはマルクス主義的史観と糾弾する右翼的修正主義者に対する積極的なアンチテーゼとなりえないからである。戦後責任の取り方の優劣といった次元での判断は、歴史を政治的ポレミックへと置き換えてしまい、いやが上にも主義主張の優劣をめぐる争いや、歴史政策というヘゲモニーをめぐる論争になりかねない。そこから生まれてくるのは、右派においては修正主義、悪の相対化、自国中心の「国民の物語」の創作であり、左派においては非現実的な理想主義にほかならない。

戦後の日本の55年体制の憲法9条をめぐる左派と右派の論争の構図がここにも「歴史」という概念を政治的土俵に場所を移しての展開に反映されていると言えないだろうか。左派陣営の非武装中立の陣営からなされる過去の戦争の罪惡論には、邪惡な軍部支配の日本は9条によって平和な未来へ再生したという樂觀主義が伴う。また、反対に右派陣営には9条は戦勝国から与えられたものとの反発が付随している。このような憲法に関する政治的な両者の基本的コンセンサスの欠如こそは日本が隣国に苦しみを与えた歴史的事実に基づく「歴史解釈」を国内政治をめぐる政争の道具にし、日本の総理の謝罪発言を何度も覆す右派の発言の温床となっている。その意味で最近までの一部左派からの無条件でのドイツの評価は、こうした日本に固有の歴史認識をめぐる戦後問題の所在から視点をずらしてしまう危険性を孕んでいることを最初に指摘しておきたい。この問題に関してはオランダ人作家のイアン・ブルマの次の視点に負うものが多い。

和解と癒しについて語るとき（どうもこの言葉は好きになれませんが）、根本問題は日本人と非日本人（アメリカ人、韓国、朝鮮人、中国人）との合意にあるのではないということです。問題の核心は、日本人同士の間合意が成立していないということなのです。その理由は多分に政治上、憲法上にあると思います。戦争終結時以来そして占領初期に日本人が自国の憲法について合意ができていないならば、いったいどうやって歴史上の合意に達しようというのでしょうか。⁹⁾

では、ドイツと日本の戦争責任と戦後責任において比較できるものと比較できないものは何であるのか。これに関してはドイツのフリードリッヒ・エーベルト財団とアメリカのアジア財団が2001年11月13日、14日に東京において開催したシンポジウム「ヨーロッパ、アジア、アメリカの教科書・歴史・戦争体験」と2002年2月5日に開催されたフォーラム「60年遅れての賃金の支払い 強制労働に対するドイツの償い——日本にもあてはまるのか？」が多くの示唆を与えてくれたのであるが、そのシンポジウムの主催者の一人である、エーベルト財団のゲープハルト・ヒールシャーは次のような区分を行っている。

(A) 比較できないもの

1. 地勢 まず明白で議論の余地がないものから始めよう。日本は島国で、ドイツは大陸の真ん中にある。ドイツがヨーロッパの隣人たちに再び受け入れてもらいたいと思うなら、過去の行為について隣人諸国が納得できるような方法で折り合わねばならなかった。対照的に、日本は隣国を無視して過去から逃げおおせられると長い間思っていた。いずれにせよアメリカが守ってくれたからである。

2. ホロコースト 日本にはとるべき責任がたくさんあるが、ドイツとヨーロッパのドイツ占領地域でユダヤ人に対して行われた、国家組織による残虐きわまりない組織的大量殺戮に匹敵するような行為をしていないのは確かだ。従って、ユダヤ人にしたことへの自責の念を少なくとも象徴的、金銭的に表明するドイツの努力を、日本の悪行の犠牲者に対してしたこと、あるいは、しなかったことと比較するのは、アンフェアであり、不適切である。

3. ヒロシマとナガサキ 原子爆弾はもともとドイツ攻撃のために開発されたが、1945年7月に使用準備が整ったとき、アドルフ・ヒトラーのいわゆる第三帝国はすでに崩壊していた。日本に落とされた二つの原爆のあまりに恐ろしい被害にショックを受けた多くの日本人は、自分たちが人道に対する犯罪の犠牲者だと考えるようになり、日本人がアジア人やその他の外国人に対して犯した罪を都合よく忘れてしまった。人類に対する最初の核兵器使用を視野に入れ、元日本駐在アメリカ大使でハーバード大学教授のエドウィン・O・ライシャワー氏の言葉をここに引用しよう。「日本の指導者に衝撃を与えて降伏に追い込むため、広島に最初の原爆を使ったことについては言い分もある。降伏か否かという決断がこの時点ですら揺れ動いていたからだ。だが2発目を落としたことに関しては、いかなる正当化もありえない。」

4. 敗戦 ドイツは1945年5月に降伏した。その月の23日、連合国側は第三帝国最後の政府を廃した。ドイツという国家は消滅し、四つの占領地区に分けられてそれぞれアメリカ、英国、フランス、ソ連によって直接統治された。きっかり4年の後、西側三つの占領地区にボンを臨時首都としてドイツ連邦共和国（いわゆる西ドイツ）が成立した。その1週間後、ソ連の占領地区に東ベルリンを首都としてドイツ民主主義共和国（いわゆる東ドイツ）が建国された。5年の「断絶」の後にドイツは二つの競合国家として再生したのである。一つのドイツに統合されたのは、それから41年後の1990年10月のことだった。対照的に、日本は国家として継続した。1945年の8月15日（天皇の玉音放送の日）と9月2日（降伏文書署名）という二段階を経て降伏したが、昭和天皇は未だ在位しており、政府の役人がまだ執務していた。ドイツと違って、日本は複数の占領地区に分割されずに、単体として日本の官僚制を通じ、アメリカが主導する単一の占領当局によって間接統治された。この状態は1952年に主権回復するまで続いた。ドイツと比較したとき、日本の戦後初期を描写するキーワードは「継続」であろう。

(B) 比較できるもの

以上に述べた主な違いを除外した後、残された大きな領域が日独比較の対象となる。例えば、他国に対する武力による侵略戦争、占領あるいは植民地化した領土での政策や行為、狭い法的意味での戦争犯罪、すなわち、「通常の」戦争行為を逸脱したとみなされる犯罪、そして最後に、両国が1945年以来、こうした戦争の遺産にどう対処したか、など。

1. 戦争犯罪の告発 連合国はドイツと日本に対し、それぞれニュルンベルグと東京で戦争犯罪裁判を行った。だが、日本政府が東京裁判で有罪判決を受けて10年間服役していた最後の1人を巣鴨拘置所から釈放するように命じた、そのまさに同じ年（1958年）、ドイツではルードヴィッヒスブルクという町に「ナチス犯罪解明本部」が設立された。この組織は現在も活動しており、これまでに10万人の被疑者に対して刑事訴訟手続きを行い、そのうち6500人が戦争関連犯罪で有罪とされた。言い換えると、ドイツの法廷は人道に対する罪を犯したドイツ国民に有罪判決を今も下し続けているのだ。これとは対照的に、日本の検察と刑事法廷は日本人被疑者に対して何の追求も行っていない。¹⁰⁾

ヒールシャーによるこうした比較についての判断はここでは控えておくが、「日本は隣国を無視して過去から逃げおおせられると長い間思っていた。いずれにせよアメリカが守ってくれたからである。」という彼の発言からは、ドイツも最初は西側諸国だけとの和解しか念頭においていなかったのではないか、全面講和ではなかったし、鉄のカーテンの向こうにあったポーランドとの和解には1972年のブランド政権まで積極的に行わなかったではないか、という批判もうまれてこよう。さらには「日本人は、自分たちが人道に対する犯罪の犠牲者だと考えるようになり、日本人がアジア人やその他の外国人に対して犯した罪を都合よく忘れてしまった。」という発言に対しても、ドイツ人の健忘症、被害者意識に対する批判が多々あることを付言しておく必要がある。

この意味で、日本とドイツの戦後責任の取り方、とりわけ、外交面での違いに関するヒールシャーとは異なった視点からのドイツ人の発言を紹介する。それは、ドイツの自由民主党(FDP)の政治家で元の経済大臣、第二次世界大戦中の強制労働に関するアメリカ政府との交渉においてドイツ側代表を務めたオットー・グラーフ＝ラムズドルフ氏の発言である。彼は2002年2月5日に開催されたフォーラム「60年遅れての賃金の支払い 強制労働に対するドイツの償い——日本にもあてはまるのか？」において次のように述べている。

私は日本へ助言に来たわけではありません。私たちの体験を紹介し、私たちが補償問題に取り組むに至った動機についてお話しするだけです。そこから、どのような結論を導き出すかは、日本の皆さんです。私たちが1949年以来やってきたことの背景には、倫理観に基づくだけでなく、政治的な関心に基づく部分もありました。ドイツはヨーロッパで、国境を接する国が最も多い国です。ドイツは文字通り、それらの国のほとんどを第2次世界大戦中に侵略しました。歴史と責任の問題に私たちが対峙しない限りは、それらの国々と正常な関係を取り戻すことはできなかったのです。藤原帰一先生が指摘した日本の「被害者意識」は、同じようにドイツでも1945年以来、ずっとありました。¹¹⁾

彼の発言は、ドイツのリベラルな政治家たちの共通認識と言えよう。彼はFDPという小政党に属する政治家であったが、近隣諸国との和解がドイツの存続と発展にとって絶対不可欠な政治的最優先課題であったという認識は、他の政治家の発言にも多々見出される。¹²⁾

ドイツ人の政治家の多くは、日本の戦後責任の取り方に関しては発言を控えているが、次のラムズドルフが語ったエピソードは日本とドイツ両国では政治と世論、民意の距離に大きな差があることを気づかせてくれる。

藤原帰一先生は、ドイツにも日本と同様に存在する現象について述べました。人々と政治家の間の距離です。政党の支持がなければ、ドイツ議会の、ドイツ政府の、マスコミの、右から左まで、すべての人の支持がなければ、私はこのような仕事を成し遂げることはできませんでした。また、必ずしも世論だけが後押ししてくれたわけでもありません。「政治上の建前」の世論の支持だけでなく、一般市民の本心からの支持を得られました。例えば、私がワシントンへ飛んだとき、ルフトハンザ航空のスチュワーデスが言いました。「ありがとうございます。あなたがおやりになっている仕事を応援しています」。私はごく普通の市民、今までに

会ったこともなく、また再び会うこともないような人たちの支持も得ていたのです。¹³⁾

筆者は、このエピソードの中に、ドイツの戦後の民主主義が目指していたものの実現を見る思いがする。ごく普通の一市民である客室乗務員が、国の代表である政治家の渡米目的とその意義を知っており、しかも自然な形で謝意と賛同を身分のへだてなく表明できるという事態に新鮮な驚きを覚えた。自国の過去の犯罪を償いに渡米する政治家に市民が感謝と賛同を行うという、この短いコミュニケーション行為において、政治家が自国民の幅広い階層に支持されている証しを自然な形で汲み取ることが出来るのではなかろうか。これこそは「許しを請い、償わせて欲しい」という政治家の姿勢への市民の側からの感謝に満ちた代理権委任であり、賛同表明に他ならない。

ラムズドルフは、「財団資金について合意が成立した1999年12月にヨハネス・ラウ大統領が行った演説は、関与者全員にとって救いであり、心に滲み入るものでした。」と述べ、続けて、大統領の演説を紹介している。

「犯罪の犠牲者にいかなる額を支払おうと、真の賠償にはなりえないことを、ここにいる誰もが承知しています。何百万人もの男女にふりかかった苦しみは決して取り返しのつくものではありません。生存者の多くにとってほんとうに重要なのは金銭ではないことを私はよく知っています。この人々は、自分たちが味わった苦しみを苦しみとして、自分たちに行われた不正を不正として認識してもらいたいのです。私はドイツ支配のもとに強制労働あるいは奴隷労働に従事させられたすべての人に賛辞をささげ、ドイツ国民の名においてここに許しを請うものです。』¹⁴⁾

Ⅱ) 戦後ドイツにおける基督教の基本法と政治への影響

ドイツ人の犯罪に対してポーランドの公衆の前で頭を垂れた最初のドイツ人政治家はビリー・ブランドであったが、それから約4分の1世紀後の、1994年8月1日のワルシャワ蜂起50周年に参列したローマン・ヘアツォーク大統領の演説に耳を傾けたい。

我が国の国家元首としてポーランドの首相と国民に本日のご招待を誠に感謝申し上げます。同時に私の列席に批判的な方々の心情を理解いたします、そしてその方々に敬意を表明いたします。

...

我国と我が国民の名はポーランドの何百万もの方々に科せられた痛みと苦しみと永遠に結び付けられるであろうということを考えると、我々ドイツ人の心は恥ずかしみで満たされます。

...

今日、私はワルシャワ蜂起に立ち上がった全ての方々、とりわけ戦争の犠牲となられたポーランドの人々の前に頭を垂れ、許しを請います：ドイツ人によってあなた方になされたことに対する許しを。¹⁵⁾

心底から「許しを請う」という表明にドイツの市民の多くが賛同していることはドイツに

おけるキリスト教（しかもアウシュビッツを経た後のキリスト教倫理）と戦後民主主義が相互補完的に形成した精神的姿勢に基づくものであろう。ドイツ人の謝罪行動におけるキリスト教の倫理観については日本ではあまり言及されていないが、このことを避けて通ることはできない。法学博士ローマン・ヘアツォーク元大統領はドイツの憲法裁判所長官を務めたが、彼は法律の言葉で許しを請うていない。

ところで、彼が法の番人として関与してきたドイツ憲法「基本法」前文には「神」への言及がある。ドイツ基本法は施行後何度か改正された。統一後は前文も改正されたが、ここでは1949年当時の原文を引用して、基本法の精神を根底から支えているキリスト教の精神をさぐってみよう。

Im Bewußtsein seiner Verantwortung vor Gott und den Menschen, von dem Willen beseelt, seine nationale und staatliche Einheit zu wahren und als gleichberechtigtes Glied in einem vereinten Europa dem Frieden der Welt zu dienen, hat das Deutsche Volk . . .

（訳文）神と人類に対する責任を意識して、自らの国民的、国家的統一を維持し、ひとつに結合された欧州における平等な構成員として世界の平和に貢献するとの意思に貫かれて、ドイツ国民は . . . ¹⁶⁾

憲法の前文で「神」という表現を採択している国はドイツだけではないが、「神に対して」という形而上的な責任を戦後になって、憲法に刻印せねばならなかったほどドイツの罪は大きかった、「人類に対する責任」では不十分であるとの認識がここに結実している。このことはワイマール憲法と比較する時に明白になる。

Die Verfassung des Deutschen Reichs vom 11. August 1919

Das deutsche Volk, einig in seinen Stämmen und von dem Willen beseelt, sein Reich in Freiheit und Gerechtigkeit zu erneuern und zu festigen, dem inneren und dem äußeren Frieden zu dienen und den gesellschaftlichen Fortschritt zu fördern, hat sich diese Verfassung gegeben.

（訳文）ドイツ国民は、その種族において一致して、その帝国を自由と正義のうちに新たにし、確立し、内外の平和に貢献し、社会の進歩を促進するとの意思に貫かれて、この憲法を自らに付与した。¹⁷⁾

設立当時は最も民主的と呼ばれたワイマール憲法の「von dem Willen beseelt：意思に貫かれて」という表現は1949年の基本法にも引き継がれているが、連邦共和国はその前段に、厳粛で新たな反省のもとに、「Im Bewußtsein seiner Verantwortung vor Gott und den Menschen：神と人類に対する責任を意識して」という堅信の誓いを立てたのである。ヴァイツゼッカー元大統領が演説で「人間は何をしかなえないのか——これをわれわれは自らの歴史から学びます」¹⁸⁾と語った背景には、歴史の中における人間の墮落の可能性、悪魔性

を忘れないでいこうという厳粛な姿勢がある。人間が考えた「法」だけでは不十分である、「法」を超えた「神」に対する形而上的な責任という刻印抜きではドイツの再建はありえないとの認識を1949年の基本法制定グループのメンバーは共有していた。その意味で、ドイツの政治家たちが、ナチズムへの反省とキリスト教の人間観をどのように政治的マニフェストとしたかをキリスト教民主同盟の党綱領に見てみよう。

1. WER WIR SIND (我々は誰なのか)

Volkspartei (国民政党)

ドイツキリスト教民主同盟は国民政党です。我々は我が国のあらゆる階層やグループに属するすべての人々に向き合います。我々の政治はキリスト教の人間理解と神への責任に基礎をおいています。(傍線筆者)

我々にとり、人間は神の被造物であり、万物の究極の尺度ではありません。我々は人間の誤謬性と政治的行動の限界を知っております。それとともに人間は世界の倫理的構築の使命を受けその能力を授けられていることを我々は確信しております。

Politik aus christlicher Verantwortung (キリスト教的責任感からの政治)

2. 我々は、キリスト教信仰からはいかなる特定の政治的綱領も導かれなかったことを知っています。しかしながら、キリスト教の人間理解は我々に責任ある政治に対する倫理的基盤を与えてくれます。キリスト教的確信への召命から、キリスト教民主同盟の内部のみでキリスト教の責任感に基づく政治が実現しようというような要請はうまれてきません。CDUは全ての人間の尊厳と自由を、そこから導かれる我々の政治的な基礎となる信念を肯定する人すべてに門戸を開いています。

Sozial, liberal, konservativ (社会, 自由, 維持)

ドイツキリスト教民主同盟は、ワイマール共和国の挫折、国家社会主義の犯罪の後、1945年以降の共産主義の征服要求に対して、キリスト教教義に基づきながら、宗派を超えた政党を結成しようとする人々によって設立されました。(・・・)その精神的、政治的根本(原理)は、国家社会主義のテロ支配体制に対してキリスト教の信念からなされた抵抗運動とキリスト教会の社会倫理及びヨーロッパの啓蒙主義の自由な伝統に根ざしております。¹⁹⁾(傍線筆者)

さらにドイツ基本法第7条はドイツでの学校教育で宗教の授業を正規科目として認定している。²⁰⁾ それに比して、隣国フランスでは従来、公教育の場へ宗教性を持ち込むことを「ライシテ (Laïcité, 非宗教) の原則 (フランス憲法第二条) から禁止してきたことと比較すれば、ドイツの公的生活におけるキリスト教の浸透度の深さを知ることが出来る。

ただし、現在構想中のEU憲法前文にはフランスの政教分離の影響やイスラム圏のトルコの近未来での加入も顧慮した上で、「神」という表現は採択されなかったが、イタリア、スペイン、ポルトガル、ドイツのCDUなどからはローマ法王も巻き込んで現在も激しい反論が継続している。現在のEUの統合拡大にあってはキリスト教自体が公論の前面から後退し、多文化的共生のリベラルな理念に席をゆずりつつあることを指摘しておきたい。

ところで、現在のヨハネス・ラウ大統領は社会民主党 (SPD) であるが、若い頃からプロテスタントの活動に従事していた。とりわけ、ナチスに抵抗したドイツ告白教会に属し、大統領の座右の銘「Teneo quia teneor: 私は持ちこたえる、なぜなら (神によって) 持ちこたえていただくから」からも、その信条が国家やイデオロギーを絶対化しないという政治的立場が伺える。彼が敬意を抱いている、反ナチス闘争を行ったドイツ告白教会のバルメン宣言 (1934年) にはこう宣言されている。

聖書においてわれわれに証しせられているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一の御言葉の他に、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認し得るとか、承認しなければならないとかいう誤った教えを、われわれは斥ける。」(傍線筆者)²¹⁾

ドイツ史におけるキリスト教の影響について詳細に言及することは本稿の目的ではないが、政教分離が早くから確立された隣国フランスと比較してドイツにおいては、キリスト教が政治家の倫理形成に強い影響を与えてきたことは明らかである。古くはルターが信仰のみに絶対的価値を置き、封建領主への政治的服従を主張し、農民革命を弾圧する側に組みしたことや、敬虔主義 (ピエティスムス) の精神構造がプロイセンの軍人に対して服従への規律を涵養してきたとの検証もあるが、アウシュビッツの後に心あるドイツ人に根源的な罪を認識させ、その罪の深さに震撼させ、絶望の淵からの再生、「人類と神への責任」を自覚し、民主主義を育成しようという決意にもキリスト教の精神は深くかかわっていたのである。また罪の捉え方においても、絶対者からの罰を意識することによってはじめて、心底許しを求めるという行為が生まれてくるのである。以下こうしたドイツ人の宗教的罪責あるいはヤスパースの語る形而上的罪について考察し、日本人との罪責意識の差異と歴史意識について考えてみよう。

Ⅲ) 罪責の告白におけるドイツと日本の比較：ヤスパースの『罪責論』と 亀井勝一郎の『罪の意識』

戦争後直ぐにナチス・ドイツの行った犯罪に直面して、ドイツ人の罪責を問うたのは哲学者のヤスパースであった。彼は、夫人がユダヤ人であるという理由で、1937年にナチスによってハイデルベルク大学教授の地位を追われたが、戦後教授職に復帰し、1945年/46年の冬学期の大学の講義で行なった内容を『罪責の問題』(Die Schuldfrage)という表題の下に刊行した。戦後直後の混乱と不安の状況下、ナチスの犯罪が戦勝国によって暴露され、ドイツ国民に突きつけられていくさなか、ヤスパースは当時のドイツ人の精神風景を次のように描き出している。

ほとんど全世界からドイツとドイツ人に対して告発がなされている。我々の罪は憤激、おののき、憎しみ、軽蔑をもって論じられている。刑罰と報復が求められている。(・・・)ドイツには自分をも含めて罪の告白を行う人もいるが、自分は無罪で、他の人を有罪であると語る人が多い。人々の関心は問題から逃れようとするにある。我々の生活は困窮の中にある、大半の国民はあまりにも大きな困窮を直接体験しているため、そのような論議に対して無感覚になってしまったようである。人々の関心は、何によって困窮を防ぐことができるのか、仕事とパンを、住居と暖をもたしらしてくれるのは何なのかにある。視野がせばまってしまった。罪や過去については聞きたくない。世界史には心を動かされない。求めているのはただ、困窮が無くなること、困窮からの脱出、生きることであって、考えることではない。むしろ、このような恐ろしい苦境の後では報酬でも貰うか、せめてねぎらってもらわなければならない、決してこのうえ、さらに罪をかぶせられたりするようなことがあってはならないといった気分が支配的である。²²⁾

ヤスパースはさらに、あまりにも簡単に自分の罪を告白し、自分の利益を求めて戦勝国におもねる態度を批判し、ドイツ人自身がそれぞれの過去を見つめ、「共に語り合う」ことを要請する。その上で彼は、罪責概念について確固とした法的・哲学的規定を行い、ドイツ人の罪責を4種類に分類し、定義づけている。

- 1) 刑事的罪 個人或いは集団の犯罪行為
- 2) 政治的罪
- 3) 道徳的罪
- 4) 形而上的罪²³⁾

ヤスパースは上記の罪の分析をドイツ人個々人とドイツ国民全体の視点、裁く立場と裁かれる立場の視点からも行っている。すなわち彼はドイツ民族の集団的罪(Kollektivschuld)に対する見解に揺れ動きながらも、ナチス政権誕生と存続に対するドイツ人の集団的政治責任と個人的道徳的責任を厳しく指摘する。

道徳上の過誤は、政治上の罪と刑事犯罪が生じてくるような状態の土台をなすものである。数知れぬ小さな怠慢行為とか安易な順応とか、安価な理由をつけて不正を正当化したり、知らずしらずのうちに不正をう

ながしたり、社会全般に不明朗をかもしだしてそれ自体が悪の温床となるような社会的雰囲気の発生に力を添えたりする行為は、社会の状態や出来事に対する政治上の罪を生じる一つの条件ともなるべき結果を生むのである。²⁴⁾

ヤスパースは大半のドイツ人の生き方を「仮面をかぶった生き方：Das Leben in der Maske」として道徳的罪の温床であったと語る。

仮面をかぶった生き方は、生きながらえることを望んだ人たちにとっては避けることのできないものであったが、これによって道徳上の罪がもたらされた。ゲシュタポのような脅威の機関に対して欺瞞的な忠誠を誓うことや（手を挙げて）ヒットラー式挙動を行うことや、集会への参加や、見せかけであっても自分自身がその場に居合わせるという様々なことなどにおいて、一体ドイツ人の中で一度もそのような罪を持たなかった人はいるだろうか。²⁵⁾

また、別の箇所ではユダヤ人商店のボイコットや襲撃、シナゴグへの焼き討ちなどの不法行為が行われながらも、これに憤激し、将来の危険を感じ、衝撃を受けた人の数よりも「何ごともなかったかのように、なんら煩わされることもなく、自分の仕事を続け、社交と娯楽を続けていく人の数は多かった。これが道徳的罪なのである。」と語っている。

さらには、国防軍の将兵の「命令に従った」という「軍人の忠誠」に基づく弁明や、「騎士道的勇敢さ、戦友への犠牲的献身」などの美的側面の強調に対しても呵責のない批判を加える。ヒットラーに忠誠を宣誓し、良心を麻痺させた軍隊においては「現実の政権をドイツ国民と軍隊と無条件に同一視」してしまう取り返しのつかない認識が蔓延していた。こうした組織においてはさらに、「汝に対して権力を持つ上司に対して従順であれ」という聖書の言葉が悪用され、それが軍国的な伝統に基づいて、命令そのものが神聖視されるという悲劇を招いたと彼は分析する。

「命令だ。」と言えど悲壮にも最高の義務を言い表しているように聞こえたものであったし、今でもなお多くの人の耳にはそういう響きをもっている。しかし他面この言葉が邪悪非道を避けがたいものとして眉をかめながら見逃すことになれば、そこに責任のがれが生ずるのであった。このような態度が道徳的な意味において完全な罪となったのは、服従の本能によるのである。良心的なつもりでその実、良心を全く棄ててしまった本能的な態度によるのである。

1938年、ユダヤ人の教会が焼け落ちてユダヤ人が初めて追放されたとき、道徳上ならびに政治上の罪が生じたわけである。（・・・）将校団がこの事件に立ち会っていた。どの都市でも、犯罪の行われたとき、司令官がこれを妨げようと思えば防げることができたのである。犯罪が警察力では阻止できない、ないしは警察力の機能を発揮しえないほどの規模になったときに、すべての人間を守護するのが軍人の役目だからである。将校たちは何の手も打たなかった。彼らはこの刹那に、ドイツ軍隊の嘗ての誉れ高い道徳的伝統を遺棄したのである。そんなことは屁とも思わなかったのである。彼らはドイツ民族の魂を離れて、ただ命令に服

従する軍事機構、自己の法則のみによって動く軍事機構の側についてしまったのである。²⁶⁾

しかしながら、ヤスパースは精神的・物質的両面での苦境にあっても自分達の罪の認識から目をそむけることなく、それと対峙することによって、「人間としての根源的再生という課題」を心の底から深く自覚することをドイツ人全体に要請する。それはヤスパースがドイツ人として形而上的罪を痛感していたからであった。

ドイツ国内で政府に反抗して自ら死を選び、ないしは少なくともそのために殺された人々は幾千、そしてその大部分が名も知れぬ死を遂げたのだった。我々は生き残ったものは死を選ばなかったのである。我々の友人たるユダヤ人が拉致された時、我々は街頭にとびだして、わめき立て、我もまたかれらと共に粉碎されてしまうというような危険を冒しはしなかった。われわれが死んで見たところでどうにもなりはしなかったろうという正しくはあるが弱々しい理屈をつけて、生きながらえる道を選んだのであった。我々が今生きているということが我々の罪なのである。神の裁きの前に、何ゆえに深い屈辱を覚えるかを我々は知っている。²⁷⁾

ヤスパースはまたニュルンベルク裁判の持つ歴史的意義に触れ、この裁判は罪刑法的主義の原則に反するとの批判をもヨーロッパのヒューマニティー、人権、自然法と自由と民主主義の伝統という立場から反駁した上で、この裁判では裁かれない道徳的罪と形而上的罪については、「個人のみがこれをおのれの属する共同体においておのれの罪として把握するのであり、その本質上、罪滅ぼしということがない。これらの罪は終わるとということがない。これを担う者は、生涯終わることのない過程に足を踏み入れるのである。」と語る。

罪の意識の深みから発した清めの道を抜きにしては、ドイツ人はいかなる真理をも実現することができない。²⁸⁾

これがヤスパースの下した結論であり、この道を通らずしては最早ドイツの過去の「優れた文学も芸術も音楽も哲学もその形而上的な意味内容は最早われわれの耳には聞こえない」と語るヤスパースには、ドイツの良き形而上的伝統への復帰のためにもドイツ人の「虚無を前にした根源的再生」の必然性が痛切に魂の深みで感じられていたのである。

旧約聖書の「ヨブ記」を彷彿とさせるヤスパースのような悔い改めの衝動は、しかしながら、戦争直後にあって、その日その日を生きていこうとするドイツ人には希薄であった。それについては、我々は現代の視点からはそう簡単に批判できないが、ドイツ人の罪責感情の希薄さとその精神的欠陥についてはドイツ人自身からもミッチャーリヒ夫妻の『悲哀する能力の欠如』(Die Unfähigkeit zu trauern. Grundlagen des Verhaltens 1967) がすぐれた精神分析的考察を加えている。歴史家論争の時期には、ユダヤ人の血筋を引くジャーナリストのラルフ・ジョルダーノが、『第二の罪』(Die zweite Schuld oder von der Last Deutscher zu sein 1987) において戦後西ドイツ社会において「第一の罪を心理的に抑圧し否定してきた

こと」を「第2の罪」として痛烈に弾劾している。

多くのドイツ人、とりわけポツダム会談によって東部ドイツ地域から戦後追放されたドイツ人にはひととき自分たちこそは「戦争の被害者である」という意識が強かった。この被害者であるという国民感情は、戦後の日本においても支配的であった。例えば亀井勝一郎は戦後も日本で愛読されてきた評論家であり、彼の『大和古寺風物史』は日本人に仏教美術の美を通じて魂の故郷と平安を与えたとされるが、戦中、戦後の彼の発言を通じて彼の犠牲者意識、罪責意識、歴史意識を考察してみよう。

近代日本の、たとえば自由主義と呼ばれ共産主義・唯物思想といはれたものは、悉く「平和」の時代に蔓延したことは注目すべきだ。文明の毒は「平和」の仮面のもとにはびこるのである。

戦争よりも恐ろしいのは平和である。平和のための戦争とは悪い洒落にすぎない。今次の戦乱は、かの深淵の戦争のためであって、この戦場において一切の妄想を斥ける明晰さと恐れを知らぬ不拔の信念とが民族の興廃を決するであろう。奴隷の平和よりも王者の戦争を！²⁹⁾

この言葉が亀井勝一郎のものであることを知る読者が現在どれほどいるであろう。上記の文章は「現代精神に関する覚書」と題され、『近代の超克—知的協力会議—』と銘打った雑誌『文学界』1942年10月号特集に掲載されたが、出版に先立って夏には「近代の超克」というテーマで座談会が開催された。これには亀井の他に、小林秀雄、三好達治、川上徹太郎、林房雄、京都学派の学者など13名が列席している。³⁰⁾ 亀井は1957年に『現代史の課題』において戦時中の自己に対する次のような弁解を行っている。

敢えて知識人の「弱さ」を言うなら、日本の軍人も政治家もすべて弱かったと云える。という意味は、世界にも先例のない特殊な民族変貌期にめぐりあって、いかなる方針ももちあわせていなかったということだ。(・・・) 私は自他を含めて、知識人の「弱さ」を弁護しようというのではない。戦争協力も根本的には我々の倫理的欠陥としてみとめる。ただ以上に述べたところから、私は知識人の特殊な犠牲者の性質にふれておきたかったのである。戦争はたしかに無謀であったが、冷静に考えるなら明治開国以来の「西洋文明」の受け入れ方からしてすでに無謀だと云えないか。しかもそれは不可避であって、現代の知識人はこの無謀の犠牲者の性質を帯びているということ、二重の「特殊文化圏」内における特殊な実験を、自己の運命とせざるをえなかったということを、私は特徴の第一にあげておきたいのである。(『現代史の課題』168～169頁)

亀井は自らの戦時中の倫理的欠陥は認めているが、同時に自分自身をも日本の近代化という「特殊文化圏」の犠牲者として看做すことによって、犠牲者の一団に埋没しようとする。つまり、犠牲者とのアイデンティティーの中に、新たなアイデンティティーを見出すのである。自分達の弱さが明治以降の「不可避な」流れの中で形成されてきたこと、そしてそれに対してはなんら選択する余地がなかったこと、この「特殊な実験」にたいして抗う「いかなる方針も持ちあわせていなかった」ために軍人も、政治家も弱く、特に知識人はその犠牲となったという弁明である。この弁明には多くの日本の知識人に極めて共通する認識パターン

が看取される。それは、明治以降の歴史の変遷や戦争を地震や台風など「天災」の如く捉え、自らをも含めて日本人全体をその犠牲者にとらえる思考法である。とりわけ、自らの運命を明治以降の日本全体の運命と一体化させ、運命共同体的に犠牲者と感じる感性が顕著であると同時に、主体的な個人として個人に対峙する社会現象を科学的に捉えるという態度が稀有である。社会に対峙する科学的思考法こそが明治以降輸入されてきたにもかかわらず、このような思考方法を「転向」によって放棄させられ、ナショナルな伝統への帰依によって西洋近代からの超克を目指した亀井が自分を「犠牲者」とであると認識していったことに焦点を当てていきたい。亀井が選んだ戦時中の生き方は自分の内面の凝視と日々の仕事への献身によって日本の古典へと回帰していくことであった。

私は確かに愛国者たらんとしていた。日本の伝統、古典について眼を開き、心して学びはじめたのはこの頃である。また国内の雰囲気をもても、そこには西洋のきわめて浅薄な模倣があるにすぎず、民族としての誇りは失われていたのである。こうした状態への反省を日華事変が促したことは事実である。私は日本の歴史を学び、その真実の姿を知りたいと思った。そこからくる強い自信において西洋をも虚心に摂取したい。³¹⁾

亀井は戦前の治安法体制で、3年にも及び投獄され、マルクス主義からの転向という経験を持つ評論家である。その転向に彼は罪の意識を覚え、奈良の古都の巡礼、古の時代に精神の癒しを求めたのだが、戦時中は「近代の超克」をめぐる、彼なりの日本の近代の価値の分裂に取り組み、その分裂からの超克を模索していた。亀井は「文明開化以降の速成主義と功利性」に対して批判の先鋒を向けたが、彼にとって、「近代の超克」の規範となったのは古典の世界であり、天皇制であり、罪との関連では親鸞であった。マルクス主義からの転向を余儀なくされた亀井は「転向してから転向し始める」ことになった。それは昭和12年、彼が30歳の時の古都奈良においてであった。

日華事変はすでに起こっていたが、私は日華事変など全く眼中になく、自分一身が救われるかどうかだけが重大であった。戦乱をよそに、大和の古寺をめぐり、はじめて古仏に接したのはこのときである。美と教養を積みたいと願う自分の下心に対し、沈黙の古仏が一挙に示唆したところは「唯信」であり、告示したところは次の三点につきる。

- 一、一切を放下せよ。
- 二、人間を恐るる勿れ。
- 三、すべてを摂取して捨てず。

それは罪過を責めず、穿さくせず、ただその刹那までの自己一切を、その場で放棄することを示唆した。私は歓喜踊躍して拝んだ。強制や習慣でなく、自発的に拝むことを生まれてはじめて促されたのである。³²⁾

亀井の青年としての最初の罪責意識は転向によるものであった。その救いを彼は「一切放下」という精神の自由求めた。しかし、それは亀井にとっては生活世界から自己の内面への逃避、美的宗教体験の深化の保証としか受け止められなかったのではなかろうか。

亀井は近代の「人間を万物の尺度」としたパラダイムを批判して、「内在の罪の無限に対したとき、人間は万物の尺度ではない」、「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。日本仏教のコペルニクス的転回がここに行われた」と親鸞に依拠して語るが、転向の体験から得られた宗教体験は、亀井にマルキシズムや西洋の植民地政策に対して、非科学的で、極めて愚直な「東洋浄土」の建設を謳わせる結果になった。

人間にとって求道は無限の漂泊であり、恐らくは死以外に休息はあるまい。(・・・)たとえば我らの現に戦っているシナ事変そのものが、実は親鸞の教えの真実を語っているのだ。領土も、償金もいらぬ、云はばいかなる功利性をも拒絶した上に、今度の事変の理想がある。求めるところは東洋の浄土に他ならない。³³⁾

亀井が終戦直後の昭和21年に執筆した『我が精神の遍歴』という書において顕著な特徴は、「自己の罪責告白」ではなく、亀井個人の文学者の視点からなされた「近代の超克」のための文明批判、仏教入信への個人的な宗教体験の私小説風告白、古今東西、時代も多様な思想を放縦とも言えるような形での（それこそが浪漫派なのであろうか）引用の上に展開された人間論、そして敗戦の持つ意味への支離滅裂な言及であり、すべてが「私」を中心とした視点から文学的言語を使用して書かれた自己弁明となっている点である。さらに、亀井の言う「罪」は仏教的な視点で考察された人間に内在する罪——どの時代においても争いを生み出す根本原因としての人間に宿る罪、煩惱——であって、過去の具体的な戦争協力行為に対して言及された罪咎ではなく、戦争という具体的な社会的行為との関連において把握されていない。また、亀井においては、無節操とも言える東西の古典への頻繁な言及——キリストと仏陀が比較されるかと思えば、親鸞とパウロがすぐに登場する、仏像が賞賛されるかと思えば中世の教会伽藍が、パスカル、バレリーが、さらには奈良の古寺巡礼を行いながらゲーテの「イタリア紀行」を追想し、ゲーテのローマ悲歌を詠ずるという手筈となっている。このような教養主義的無節操さは何を意味しているのだろうか。つまり亀井という語り手によって、種々の思想が、それが有する歴史的コンテクストや社会的連関から切り離され、思想と社会の間に存する緊張的連関抜きで、全く任意に抽出され、すべてが私小説風に再構築されているが、過去の思想への無批判な回帰が困難な時代である現代から見ると、亀井の「過去」とのナイーブな連続性が際立ってくる。しかも、亀井は明治以降の西洋思想の皮相的輸入を批判し、それどころかそれとの相克におちいった自分達知識人の「犠牲者的性質」には弁明を加えながら、その西洋思想が西洋社会の中で主張してきた緊張的・対峙的要素には全く言及を行っていない。つまり、思想や信仰が具体的な時代において、体制を変革し、体制に対して超越的に対峙しうるのだという可能性への視点が欠如している。しかし、このような生活世界と思想世界との乖離は亀井だけにみられるものではなく、日本浪漫派の亀井や京都学派ほどには戦争を肯定しなかったが、消極的に戦争を黙認していった大半の昭和の知識人の実態であり、日本におけるファシズムの興隆の温床となったのである。丸山真男は

『現代政治の思想と行動』においてこう分析している。

しかし、日本のインテリのヨーロッパ的教養は、頭から来た知識、いわばお化粧的な知識ですから、肉体的生活感情なりにまで根を下していない。そこでそういうインテリはファシズムに対して、敢然として内面的個性を守り抜くといった知性の勇氣には欠けている。しかしながら、ともかくヨーロッパ的教養を持っているからファシズム運動の低調さ、文化性の低さには同調できない。こういう肉体と精神の分裂が本来のインテリの分散性・孤立性とあいまって日本のインテリをどっちつかずの無力な存在においやった。³⁴⁾

亀井に顕著な思想や芸術と生活世界（社会）の乖離の原因として、亀井の生活世界はあくまでも個人の生活世界としてしか把握されていなかったことも挙げられるのではないだろうか。

私は共産主義からの離脱を表明し、昭和十年、執行猶予になった。だが、どう考えても大嘘をついているような、演劇をやらされているような気がしてならないのだ。（・・・）

本心からの思想を述べよと云はれても、本心からの思想などというものはない。政治権力に向かったときの本心とは、牢獄は真平だという一種の快樂説だけである。『我が精神の遍歴』³⁵⁾

加藤周一はマルクス主義からの転向に関するこの亀井の言説を日本の戦中の知識人との関連で次のように入念に分析している。

（・・・）問題は、亀井勝一郎の、それも「転向」という場面での特殊な問題ではなくなり、一般に日本の知識人の多くに共通の思想と人格、イデオロギーと本心、論理的な思考と感情生活（あるいはむしろ実際の生活）の一定の関係の仕方となる。たとえば大熊信行は、その点について、もっとはっきりとした言い方をしている。「われわれも国家について、近代的な懷疑や、科学的な理論を崩壊し、それらを時には口にし、そして思惟の内面では、国家一般を否定する瞬間があったかもしれない。にもかかわらず、生活の実際において、われわれは別な考え方にしがたい、別な感じ方をしていたわけだ。映写中は映写幕の世界に吸われていたことも真実でありながら、ひとあし映写室を出れば、白昼には白昼の論理があったのだ。思想と現実とは、日本人の心でいわば明暗二つの世界であり、思想はスクリーンの上にはかないものだったのだ。」亀井のいう思想と本心の関係は、大熊の指摘する思想と現実との関係に、かさなる面があるのではないか。³⁶⁾

加藤は日本の近代における「思想」にさらに鋭いメスを入れている。

思想の生みだす価値は、実生活上の便宜、習慣、感情に、つまるところ超越しないといってもよい。倫理的価値も、美的価値も、いや価値ばかりでなく、科学的真理さえもがだ。要するに超越的な価値概念・真理概念を、日本のいわゆる近代は、生んでいなかったということである。³⁷⁾

丸山、加藤の批判的な検証を読むと、「自虐史観」的だと反発を感じる日本人が現在でもかなり存在することが予測されるので、加藤は「超越的な価値概念・真理概念」を生活世界

の中で実践した日本人として無教会派のキリスト者で経済学者の矢内原忠雄、宮本夫妻に代表される共産主義者やマルクス経済学者を挙げていることを述べておく。

最後に亀井の歴史意識についてであるが、亀井を本稿で取り上げた理由のひとつは、戦後岩波書店からマルクス主義史観に立つ遠山茂樹、今井清一、藤原彰による『昭和史』が出版されると亀井がその歴史記述に対して、「人間不在」との批判を行い、いわゆる「昭和史論争」の発端を開いたこととも関連する。亀井は、遠山たちに対して、歴史とは国民に過去との連続性を確認させ、倫理的価値観を提供すべきものであると主張し、次のように述べている。

(歴史を学ぼうとするとき、)そこには二つの欲求がある。ひとつは、自己の生の源泉を、民族性や時代の流れのうちに確認したいといふ欲求であり、もうひとつは、史上において典型的人物と思はれる人と邂逅し、新しい倫理的背骨を形成する上での根拠を発見しようといふ欲求である。³⁸⁾

太平洋戦争の記述に関してもこう批判する。

敗戦に導いた元凶とか階級闘争の戦士の名は出てくる。ところがこうした歴史に必ずあらわれねばならない筈の「国民」が不在だ。これはどういうことだろうか。日華事変から太平洋戦争に至るまで、無謀の戦いであったにせよ、それを支持した「国民」の表情や感情がどんな風に変化したか。この大切な主題を、どうして無視してしまったのか。³⁹⁾

亀井のこうした発言は現代の「新しい教科書を作る会」の綱領にそのまま受け継がれているのではないかと思えるほどの類似性を有している。さらに、1957年の「昭和史論争」で注目すべき点は、1986年から87年にハーバーマスとノルテやシュテルマーの間で展開された「歴史家論争」とも関連したテーマが既に扱われていることである。歴史家論争においても下記のテーマが強く前面に出ていたからである。

1. 歴史は、意味を供給したり、ナショナル・アイデンティティの担い手であったりすべきものなのか、そしてもしそうであるなら、いかにしてそれは可能なのか。
2. 歴史は、政治的紛争の道具として悪用されているのではないか。
3. ドイツ連邦共和国は、どのような自己理解とどのような歴史のイメージを持つべきなのか。⁴⁰⁾

特に1)の視点は19世紀以降、各国において民族主義的な歴史教育の中に積極的に取り入れられてきた経緯を含めて、次章以下で詳しく述べたい。また、歴史を国民統合の方法として使用するさいには当然2)をめぐる文教政策上の論争が生じてきた。そして、とりわけ3)の観点こそは「新しい教科書を作る会」の主関心事である。

さて話を亀井の歴史意識に戻そう。歴史書としての『昭和史』には亀井以外からも「俯瞰

図的な外面からの叙述であり」、「後味のむなしさ」という失望も寄せられており、必ずしも高い評価は受けていないが、亀井の要求は歴史を文学（物語）に解消しようとも思えるもので、遠山からはすぐに次のような反駁がなされた。

私のはっきりとさせたいことのひとつは、歴史学・社会科学で人間をえがくことと、文学・芸術で人間をえがくことの内容上のちがいである。歴史学は、人間の歴史的社会的存在であることを、論理的にあきらかにしようとする。これに対し、文学は、歴史的社会的存在である人間そのものを形象をもってえがくものであろう。歴史学も文学も、歴史＝人間の真実をつきとめる。その目的はひとつである。しかし文学は、人間およびその生活が、いかに個性的なもの、偶然的なもの、かけがえない特殊において存在するかをえがくことを通して、前記の目的にせまるのである。ところが、歴史学はそうでない。個性の差をふくみこみながら、人間が階級として存在すること、偶然を貫きながら必然性が実現されていくことをこそ、あきらかにするのである。（筆者による現代語表記。…印は原文のまま）⁴¹⁾

さらに、遠山は「今次の戦争を近代一般の罪であるとするのでは、平和を守る条件としての民主主義の問題は消え失せてしまう」と亀井の脱歴史的思考を批判する。ただし遠山に代表されるマルクス主義的歴史観には歴史把握の上で「階級を強調するあまり、全体のイメージを見失うようなことがある」との桑原武雄の批判もあり、今回は亀井対遠山の論争にはこれ以上言及しないが、歴史上の人物個々人の「物語」への共感を強調し、そこにナショナル・アイデンティティーや「倫理的背骨形成」の養分を見出そうという立場と社会科学的アプローチの拮抗という歴史学のパラダイムをめぐる対立は現在の日本ではまだ係争中である。

本章を締めくくるにあたって、敗戦について亀井の言説を聞こう。

敗戦の直後、私は次のように書いたことがある。敗れたものは、これを機縁として、戦争と平和の区別なき人生の一切の重荷の重さをしかと感じなければならぬ。（・・・）罰せられることに小心翼翼として、自己の罪を計量し、「より罪少なきもの」として生存するよりは、いっそ世界のあらゆる罪を引き受けた方がよい。侵略、残虐、殺人、強奪、姦淫、地上の罪過を悉く背負って、日本は世界一の悪者となり、ここに自己を定着せしめて、「悪人正機」を実証する以外にあるまいと。大衆菩薩道は惨落の涯に来る。またしても夢かもしれない。しかも日本民族の可能性は、自己ひとりの罪惡凝視のみにある。「文化国家」などではない。⁴²⁾

親鸞の悪人正機説に依拠しての亀井の戦争協力への反省は、宗教感情の追体験という面では理解できるが、犯してもいない罪までひっくるめ、「地上の罪過を悉く背負って」という表現は全く現実的ではない。亀井はそもそも現実コミットしようなど考えておらず、自分の内面の感情だけを独白しているに過ぎない。亀井に特徴的な精神史的歴史把握に起因するところの現実の錯綜的認識が上記の引用にも見てとれる。しかし、亀井の歴史的空想は次の叙述においてその錯綜ぶりの頂点に達する。

日本は敗戦によって、世界の政治的弱者となった。「戦争放棄」とは、政治的弱者の強力に生きる唯一の道

かもしれない。それは政治によって支えられるべきものではあるまい。私には親鸞の声、パウロの叫びが根幹をなすように思われる。古来の宗教的民族、たとえば釈迦族にしても、イスラエルの民にしても、政治的には敗残の民であった。同属の滅亡の上に救世主は生まれた。私は日本の未来に対して奇妙な期待をもつことがある。日本民族は滅びてはならない。しかし滅びたとき宗教が新生するかもしれない。日本の惨落によって東洋が再生するものならば。これは恐ろしい期待だ。釈迦族、イスラエル族、つづいて「第三の民族」を世界は求めているようにみえる。第三の救世主を。⁴³⁾

筆者は亀井の存在が海外で殆ど知られていないことに安堵する。「第三の民族」あるいは「第三の救世主」という言葉がヨーロッパ人やユダヤ人にとって即座に「第三帝国」を連想させること、そしてこの帝国の「民族」こそが世界で最も宗教的な民族に対して救世主ではなく、シヨアーをもたらしたということに対する亀井の無知。ゲーテを愛しながら、キリストを讃美しながらこのような文章を書く亀井の「野蛮さ」。そして日本人が救世主になることへの期待に潜む空想的エスノセントリズムに大きな驚きを禁じえない。

また、亀井はしばしば聖書を引用するが、亀井の宗教体験には現存する国家体制、法体系を超越する神の裁きという視点は存在しない。罪＝過去からの克己が神の許しと愛によってなされて、初めて人間は自分を乗り越えていくことが出来るという、許しと救済の神学は、したがって、人間が過去を忘れ、神を忘れて、自らが歴史の主体となろうとする時に危機が訪れることを繰り返し警告してきた。

聖書の歴史は罪と救済の連続となっている。キリスト教の考える歴史は救済の歴史であって、絶対者である神が歴史を決定づける。絶対者である神が愛により現在に介入してくるという超越論的な神の秘蹟を通してのみ救済が可能であると考え。キリスト教の歴史は人間とは絶対的な隔たりを持つ神による救済の歴史であり、そこからカール・バルトの反ナチス闘争の精神的原理である「バルメン宣言」の確信「二人の主人には仕えられない」という信条がナチス政権樹立1年後の1934年というに早くも表明されたのであった。このバルメン宣言にも通じる矢内原忠雄においてみられたキリスト教信仰の強靱さは亀井には見出せない。矢内原は次のように記して東京帝国大学を追われた。

今日は、虚偽の世において、我々のかくも愛したる日本の国の理想、あるいは理想を失った日本の葬りの席であります。私は怒ることも怒れません。泣くことも泣けません。どうぞ皆さん、もし私の申したことがおわかりになったならば、日本の理想を生かすために、一先ずこの国を葬ってください。

『通信』1937年（昭和12）10月号

Ⅳ) 歴史の意味とアイデンティティーをめぐって：歴史家論争とその背景

序章でも述べたが、本稿はドイツと日本の戦後責任の優劣を問うことを意図していない。アウシュビッツという犯罪史上比較不可能な現実を目のあたりにしてのヤスパースの言説の

背景にある衝撃と、亀井の敗戦の受け止め方には衝撃の大きさの差だけではなく、世界から糾弾されていたドイツ、戦勝国や隣国からひどい報復を受けるのではないかという不安にののいていたドイツ、神の現前で自己の罪の深遠の深さに呻吟し、根源的再生の道を模索していた少数のドイツ人の精神状況と決定的に異なるものがある。それは亀井が敗戦を日本の不幸な「近代」の崩壊とだけしか受け止めていなかったことから看取できる。それに対して、ヤスパースがドイツ人の四つの罪責の分析や「集団的罪は存在するのか」という命題を立てながら、政治学的、法学的、道德論的、形而上学的方法に基づいて言説を展開したことの功績は大きい。なぜなら、ヤスパースに続いて、その後のアウシュビッツとドイツ人をめぐる言説には、精神分析学的方法（ミッチャーリッヒ）、社会哲学的方法（アドルノ、ホルクハイマー、ハーバーマス）、歴史学（マイネッケ）などが続き、⁴⁴⁾ この問題に対する高度の学問的言説を積み重ねていき、50年代、60年代の戦後復興期にあってドイツでも過去の問題が世論から後退するなかで、風化を防止したからである。亡命者の帰国もこの問題を風化させる大きな歯止めに貢献した。そして、68年の学生紛争で忘れかけられていた「過去」は若者たちによって暴かれた。彼らは大学で、家庭で、権威にある者、年長者に根源的な問いを突きつけた。「貴方たちはあの時何をしていたのか」と。そしてヤスパースから40年後にハーバーマスは総括して次のように語った。

つまり我々はもしも自分自身を否定したいのでなければ、自分たちの伝統を認めなければならない。したがって、伝統を回避するような戦略を取るわけにはいかないというこの点では、私はドレッガー氏とすら同じ意見である。しかし、こうした伝統や生活形式との実存的な結びつきは、もしもそれが筆舌に尽くしがたい犯罪によって毒されている場合、どうなるのであろうか。法治国家であることを、そして人文主義的な文化を誇りにしている、きわめて文明化されたこの国民に、[戦後の] 一時期はこの犯罪への責任を負わせることができた。つまりヤスパースの意味での集団的共通責任である。こうした責任のなにがしかは、次の、そしてさらに次の世代にも受け継がれていくのではなかろうか。私の考えでは、我々はこの問いを、ふたつの理由から肯定しなければならない。

まず、第一には、ドイツにおいてこそ我々は、ドイツ人の手で虐殺された人々への苦悩への追憶を、いかなる歪みもなく、そしてただ頭でだけではなく——他の誰もがそうしようとしなくても——目覚めさせておく義務があるということである。彼ら死者たちは、後から生まれた者たちが追憶という手段によって果たしうる連帯、その弱いアネムネーシスの力を受け取る権利を今やますますもっている。この追憶はなんともなんとも繰り返されるものであり、時には絶望的なものであろうし、そしていずれにせよ良心の呵責にさいなまれる追憶であらうが、それを受ける権利を彼らは持っている。ベンヤミンが遺贈してくれたこの追憶を、もしも我々が無視するならば、ユダヤ人市民たちは、そしてそもそも虐殺された人々の息子や娘、そして孫たちは、この国ではもはや息をすることができないであらう。(・・・)「負債としての記憶」を多くの連中は演説のタイトルだけで振り回している。⁴⁵⁾

追憶 (Eingedenken) という行為と過去との対峙によって現在を充実させ、未来を実現しようとする思惟のあり方に関するベンヤミンの歴史理解はアドルノを経てハーバーマスに継承されたのだが、ハーバーマスはベンヤミンの次のような歴史哲学的言説を敷衍しようと

しているのである。すなわち、現在の我々が過去に向き合い、過去に内封されたあらゆる「可能性のモナド」を発掘し、「再発見」することによって、逆説的にも、現在の我々が存在しているという根拠を見つけ出していくことになるのである。それは我々自身のためであるよりは先ず何よりも敗者や死者たちのための思索行為である。つまり我々の生きている存在根拠と未来とは、失われた過去の犠牲を取り戻すことによってのみ充実させることのできるものなのであり、したがって、私たちが今生きる使命とは、過去に失われた可能態のモナドをひとつひとつ収集していく作業であって、その行為を通じて現在を充実させ、「ありえたかもしれない過去の可能性の救済・解放」によって生まれて来る未来の可能性を高めることにほかならない。

ベンヤミンの歴史哲学の目的についてはスーザン・バック・モースが次のように要約している。

その目的とは、「現在をクリティカルな位置におく」過去の抑圧された要素（その実現された暴虐とその実現されなかった夢と）を意識内に持ち込むことであった。弁証法的イメージにおいて、歴史の断片を寄せ集める作業の指針となるものは、変革の可能性の契機としての現在なのである⁴⁶⁾

しかし、こうした「実現された暴虐」と「殺された人々の実現されなかった夢」を常に意識に持ち込むことが最も求められているドイツにおいて、ナルシズム的な歴史解釈が台頭してきていることに対してハーバーマスは警鐘を鳴らした。

だが [第二点として] 現在の論争で問題になっているのは、我々がなすべきこの哀悼のことではない。むしろ、どちらかといえばナルシズム的な問題、つまり我々が——我々自身のために——どのように自己の伝統に対応すべきかという問題である。伝統への対応に幻想が伴うならば、犠牲者への哀悼すらが茶番となるであろう。連邦共和国における公式の自己理解に関しては、この点での答えは明解である。それはホイス大統領からハイネマン大統領の場合であれ、ヴァイツゼッカー大統領であれ同じである。つまりアウシュビッツ以降、我々がナショナルな自己意識を汲み出しうるのは、我々のより良き伝統、それも鵜呑みにせずに批判的に獲得した歴史の中の「歴史から選び取った」より良き伝統からのみである、ということである。ナショナルな生活のありかたが人間の共同生活の基盤を比較不可能なまでに破壊することを許してしまった以上は、その生活様式を継承していくにあたっては、道徳的破局によって学んだ、疑い深い視線に耐えられるような伝統の光にあてる以外にはない。そうしなければ、我々は自分自身を尊敬することもできなければ、他者からも尊敬されることを期待できないであろう。このような前提がドイツ連邦共和国の公式の自己了解を支えてきた。⁴⁷⁾

ハーバーマスが力説する、自国の伝統への「疑い深い視線」を通じての「ポスト伝統的なアイデンティティー」の了解の是非が歴史家論争の主眼目であったが、「歴史家論争」におけるハーバーマスの敵対者たちノルテやシュテルマー、ヒルグラーバーの主張を簡潔に次のように分類しておく。

1. アウシュビッツは、何はさておき伝来の反ユダヤ主義から結果したのではないし、その核心においてたんなる「民族虐殺」ではない。そこで問題になるのは、とりわけロシア革命のさまざまな抹殺事件に対する、不安から生まれた反動なのである。
第三帝国時代のいわゆるユダヤ人の根絶が、ひとつの反作用なしは歪んだコピーであって、初めて生じた事件ではないし、オリジナルではないという事実。(ノルテ)
2. 右派はテクノクラシーに依拠し歴史を過小評価し、左派は進歩に捕らわれて歴史を扼殺していることが、この国の政治文化を大きく傷つけていることも明らかである。失われた歴史を求めることは、抽象的な教養のおつとめなどではない。それは道徳的に正当で、政治的に必要な課題である。というのも、肝心なのはこのドイツの共和国の内的連続性の維持であり、また外交政策上の予見可能性だからである。記憶を失った国においては、なにが起こるかかわからないのである。(シュテルマー)
3. ドイツ東部戦線での国防軍の戦争末期の奮闘は赤軍の蛮行から西側世界を守る防波堤の行為として評価されるべきである。(ヒルグラーバー)⁴⁸⁾

歴史家論争には参加していないが、この時期なされた連邦議会議員のアルフレッド・ドレッガーの次の発言は、歴史に国家的・統合的役割を担わせようという意図ではシュテルマーと同じ立場に立つ。

歴史の喪失と自らの国民に対する仮借の責め立て振りを、われわれは憂慮せざるをえない。他の諸国民には自明のものである基本的な愛国心なくしては、われわれの愛国心なくしては、われわれの国民もまた生きてゆくことはできないだろう。いわゆる「過去の克服」はたしかに必要なことであったが、われわれの国民から未来を奪い取るためにこれを濫用する者に対しては、われわれは意義を申し立てないわけにはいかない。⁴⁹⁾

これらのテーゼに対してのハーバーマスの反論は以下の言説に集約されている。

今日「歴史の喪失」として嘆かれている状況は、実際は、単に歴史の隠蔽や排除を意味するものではないし、また、罪を背負わされ、それゆえに過ぎ去ろうとせず立ち往生している特定の過去にこだわりすぎているというものでない。もし、若い人々の間で国民的シンボルが、その影響力を失ってしまったとするなら、またもし自らのルーツとの素朴な一体化が、歴史とのむしろ仮説的な付き合い方に道を譲ったとするのなら、(・・・) 国民的自負や集団的自尊心が、普遍主義的な価値指向のフィルターを通して濾過されるのなら、これらのことが現実にあてはまる程度に応じて、ポスト伝統的なアイデンティティーが形成される兆しが増大してゆくのである。(・・・) もしこうした兆しが表面的なものではないとするのなら、それらはただ一つのことを表している。すなわち、われわれは、道徳的な破局がもたらしたチャンスをも、まったく無駄にしていたわけではない、ということである。⁵⁰⁾

ハーバーマスは、ナチス時代の犯罪を相対化という修正により、平板化し、その前の1000年のドイツ史との連続性を回復しようという一元的歴史観を「閉ざされた歴史像」と呼び、それに対して公共性という場——そこには様々な見解がある——を通じて獲得された多元的な視点を伴う解釈の重要性を強調している。

解釈の多元主義——それは、決して野放しにされた多元主義ではなく、透明性を与えられた多元主義である——はもっぱら開かれた社会の構造を反映しているのである。そのような多元主義こそがアイデンティティーを形成する自らの伝統を、その両義性において明らかにする機会を切り開くのである。まさしくこのことは、多義的な伝統を批判的にわがものにするためには、すなわち、第二の自然として現れる閉じた歴史像とも、反省を経ることなく全員によって文句なく共有された伝統的なアイデンティティーとも相いれない歴史意識を形成するためには、必要なことである。⁵¹⁾

ハーバーマスのこうした、反省を経ることの無い伝統への帰属の拒否を考える上で、アドルノの影響を忘れることはできない。

「アウシュビッツのあとで詩を書くことは野蛮である」とはアドルノの言葉であるが、ヤスパースより20歳年下のユダヤ人系ドイツ人哲学者テオドル・W・アドルノは亡命先のアメリカから帰国して随分と時が経過した1966年になってさえ、次のような言葉を残している。

アウシュビッツのあとでも、お前は生きつづけることができるのか、偶然免れはしたものの、当然殺されてしかるべきであった者であってみれば、いっそう生きつづけることなどできるものだろうか。このような者にとっては、ただ生き残るだけのためにも冷酷さが必要なのだが、この冷酷さこそほかならぬブルジョワ的主観性の基本的原理なのであり、それがなければアウシュビッツもありえなかったであろう。アウシュビッツは、生き残ってしまったものが犯しつづけている過酷な犯罪だということになる。(傍線筆者)⁵²⁾

アドルノがナチズムにおいて見出した「野蛮さ」は全体主義と「同一性」の強制的結合であった。ここにおいて科学や官僚制は人間を幸福にするものではなく、徹底的に管理された世界において新たな形の非人間化の種子を抱懐するものであることをアドルノは見抜いていた。「非同一性の哲学」を標榜するアドルノにとって人間の生は非同一性そのものであり、彼は「アウシュビッツこそ、純粋な同一性という哲学上の学説が死にほかならないことを裏付けているのだ」と結論をくだす。アドルノが「アウシュビッツは、生き残ってしまったものが犯しつづけている過酷な犯罪だということになる」と語るとき、アウシュビッツをもたらしした同一性の原理が、「冷酷なブルジョワ的主観性」のあいだで今も進行しているとの認識があるのではなかったのだろうか。アドルノの「非同一性」としての生という思想から影響を受けた、ハーバーマスはアウシュビッツという悲劇を経たのちの「ポスト伝統的なアイデンティティー」の確立の内的必然性を戦後40年以上過ぎた時点でも、全てのドイツ人に要請しなければならなかったのである。当時のコール首相は、イスラエル訪問の際に、戦後生まれの若いドイツ人世代に関して、「後から生まれてきた者の幸せ」といって彼らとナチスとの責任関係を免責する発言を行ったが、ハーバーマスは若い世代に対しても「負の財産の連続性」を突きつける。

後から生まれた人々には、そもそもまだ共同責任という問題があるのだろうか。後から生まれた者であっ

でも、あのことが可能となった生活形式のうちでおい育っているという単純な事実は依然として存在している。アウシュビッツが可能となった生活のあり方と我々自身の生活が結びついているのは、偶然ゆえではない。この結びつきは内的なものである。我々の生活形式は、我々の両親や祖父母のそれとつながっている。家庭や地域での伝統、そして政治的な、更には知的な伝統が解きほぐしがたく複雑に絡み合った網の目によってつながっている。要するに歴史的環境によってつながっており、(・・・)この歴史的環境の外に自分だけが忍び出ることは誰にも出来ない。⁵³⁾

このような歴史的環境を自覚し、過去を目覚めさせておくことによって現在を常にクリティカルな状態にしておこうとする態度を、ハーバーマスは「ポスト伝統的なアイデンティティ」と呼んだのである。

次章では、20世紀を通じて国民のアイデンティティ形成に積極的な役割を果たしてきた、そして現在も果たしつつある学校教科書においてナチズムの問題はどのように取り扱われてきたのかについて見ていきたい。それによってハーバーマスの言う「ポスト伝統的なアイデンティティ」の形成に教科書はどのような形でかわってきたかを考えてみたいと思う。

V) 歴史教科書対話

本章ではドイツとフランス、イスラエル、ポーランドとの「歴史教科書」における過去の記述をめぐる教科書研究、教科書対話に焦点をあてて論じていきたい。教科書対話については名古屋大学の近藤孝弘氏の「国際歴史教科書対話」という包括的で優れた研究があるので、本稿ではドイツにおける研究と対話の中心的存在であるゲオルク・エックハート研究所の現在の所長ヴォルフガング・ヘプケン教授の『何故に、何のために教科書研究を行うのか? — ドイツ連邦共和国における教科書研究の問題提起、方法論上の問題、展望 —』と題する2001年のシンポジウム発表に敷衍しながら、ドイツにおける「過去との取り組み」の質的変遷をさぐっていききたい。

先ずヘプケンはグローバルな視点から、「教科書、なかでも歴史教科書が影響力を失って久しい。新しいメディアは、印刷された書籍に比べて、若者たちの歴史、政治意識に対して及ぼす益々の重要性を獲得している」と述べながらも、「流動するアイデンティティやグローバルなネットワーク、そして国境を越えた可動性に形容されるこのポストモダンの時代にあって、歴史が(学校で学ぶ歴史も、学術としての歴史も)今なお指針を与えることができるのかどうか疑問が付されているのだ。(・・・)しかし逆に、このように悲観的な予測がなされているにもかかわらず、繰り返し社会的な(国内あるいは国家間の)紛争に火をつけているのが教科書である。今も変わらず、教科書は社会が求める価値や規範を媒介する。それは国が優先するアイデンティティを伝える手段であり、つねに政治秩序の正当性を意思表示する手段でもある。だからこそ現代の教科書はくりかえし、公開論争の対象とな

るのだ。」⁵⁴⁾と述べて「社会と教科書のかかわり」の存在理由を強調している。ヘプケンにはドイツにおける隣国との「歴史教科書対話」の目的と課題を振り返って年代順に次のように分類している。

1. 教科書研究はヨーロッパの啓蒙主義という伝統に従って、平和を守り和解を促進するという手段としての教科書作りという任務を背負ってきた。従ってそれは規範的・政治的・倫理的衝動からはじまったのである。かれらは国境を越えたパートナーとの共同作業によって、以前の教科書が描いたような、他国や他国民への敵対的イメージや類型的なイメージを消し去り、そこから過去及び現在の歴史記述の合意に至りたいと考えた。つまり、各国の民族的見地によって、またしばしば民族主義的な悪用によって汚染された教科書や歴史概念を「解毒」するというのが、その基本的意図だったのである。
2. 1970年代から、歴史学及びその教授法に根本的なパラダイムの転換が起きて、歴史記述についての意見の一致を求めることを断念し、むしろ逆に、教科書の歴史記述に論争や多様な解釈を務めて明記するようになったのである。それまでの2カ国間教科書プロジェクトのように、必ずしも共通の解釈、一つの「客観的」真実を求めるのではなく、むしろ逆に多様な視点を意識して求めることが教科書研究の目的となった。新たな教科書研究の根本的評価基準となったのは、教科書が他者の視点をも伝えること、生徒にそれを認識し理解する能力を身につけさせること、そして生徒に歴史の多義性を理解させることである。(・・・)単なる歴史事実に関する知識の伝達よりも、むしろ歴史についての学習が授業の新しい目標に掲げられた。従って教科書は、歴史研究の多元性をより強く反映し、自己批判や反省をしながら自らの過去と取り組むきっかけを作るべきだとされた。⁵⁵⁾

ヘプケンはさらに2つの変化を挙げているが、それについては最終章で日本の歴史認識との関連で言及することにして、先ずは上記の2点について考えてみよう。

1. 民族主義の解毒について

ドイツ人が第一次大戦を防衛戦争と捉えたのと同様に、イギリス人もこの戦争を防衛戦争と捉えていた。或いはそのように教育されていた。イギリスの哲学者 バートランド・ラッセルは“*Education and the Social Order* (London; George Allen & Unwin Ltd., 1932.)”の中でこう述べている。「(子供たちは)自分達の国家が行った戦争はことごとく防衛のための戦争で、外国が戦った戦争は侵略戦争なのだと思うように導かれる。予期に反して、自国が外国を征服するときは、文明を広めるために、福音の光をともしために、高い道徳や禁制やその他の同じような高貴なことを広めるためにそうしたのだと信じるように教育される。」ラッセルが語る「政治による自国の歴史の正当化、修正」は、当時殆どの国家若しくは勝者が行ってきたことであり、個人が属する国家への帰属意識や一体感の涵養などが歴史教育に課せられるのは自明のことであるとみなされていた。

第一次大戦後、1928年オスロで開催された「国際歴史学会」で、戦後初めてドイツとフランスの歴史学者が顔を合わせたのであるが、この学会では戦争責任問題には触れられず、その代わりに戦争讃美や両国間の敵愾心を払拭するために、教科書とその修正について話し

合いがおこなわれた。これが「国際教科書対話」の発端であったが、こうした平和的目標はフランス小学校教員組合とアメリカのカーネギー財団の強力な支持を得た。このテーマは1932年と1934年の2回にわたって開催された国際会議で取り上げられ、独仏教科書委員会が設立されるに至った。さらに意外なことにナチスが政権に就いた2年後の1935年でさえ、パリにおいて教科書対話が行われた。そこでは18世紀初頭のルイ14世の時代から1925年のロカルノ条約にいたるまでの独仏関係に関する両国の歴史教科書の記述に関して40項目からなる修正勧告が提出された。フランスではこの修正勧告が教員向けの雑誌にて紹介され、編集者や出版社に伝えるようにとの勧告が盛り込まれた。しかし、ナチス・ドイツはこの勧告を告知せぬまま、1936年のベルリンオリンピック終了の翌年1937年、1938年の2度にわたって歴史教員組合の機関紙『過去と現代』に次のような超国粋主義的な歴史理解に基づく論文を掲載して、この対話を中断させてしまった。

生存競争のなかで自己主張をするために歴史から武器を鑄造することは、あらゆる民族の権利である。(・・・)どの民族にとっても、歴史は民族の英雄の歌曲である。ある民族にとっての英雄は、他の民族の英雄ではありえない。⁵⁶⁾

1942年のナチス・ドイツの歴史教科書にはポーランド侵略がポーランド国内に住むドイツ人救済の為として正当化され、イギリスは「ヨーロッパの敵」と記載され、イギリスとフランスは「ユダヤ勢力とフリーメーソンの影響下にある」とも非難されている。そしてこの教科書は次の様に締めくくられている。

ドイツ国民は、——ちょうどその歴史のあらゆる偉大な決定においてそうであったように——この戦争においては勝利か敗北かが問題なのではなく、存在するか存在しないかが問題であることを知っている。しかし、イギリスとの戦いにおいては単に自己防衛ではなく、地球上の全ての民族の祝福となるための欧州の正しい新秩序が重要なのだということを知っている。帝国を新たに獲得する戦いが始まったのである。⁵⁷⁾

第2次大戦後、戦争犯罪だけではなく、人道に対する罪でも厳しく断罪されたドイツにあって、ブラウンシュバイク大学の歴史家ゲオルク・エッカートを中心に、先ずはフランスと1950年に、1972年にはポーランドと、そして1979年にはイスラエルとの間で国際歴史教科書対話が展開されることになった。それは「教育による和解と紛争回避への貢献という任務」を自覚したドイツ側からの贖罪への歩みでもあった。年代順にこれら3国との対話を紹介する。

隣国のフランスとの和解は新生ドイツにとって急務であった。ここで少し視点を政治、社会に転じてみよう。戦後のアデナウアー政権(1961年まで)は冷戦構造の先鋭化の中で、生まれたてのドイツ連邦共和国を守るために親西側政策を進め、東ブロックとの対決姿勢を取った。そのなかで、歴史的に宿敵の仲であったフランスとの和解、さらには両国の相互理解と青少年の交流を促進するエリゼー条約、独仏歴史教科書対話、欧州石炭鉄鋼同盟などは

「ドイツ側からの贖罪への歩み」と同時に最重要の政治的要請からの追い風を受けていたことをも付け加えておかねばならない。1954年の両国間の文化協定にはこう記されている。

第13条 協定当事国は、国内法が許す範囲内で利用可能な方法を用い、あらゆる教育機関において相手国がより客観的に記述され、歴史教科書を中心とする教科書の中から感情的な性格によって両国民の良好な関係を害する恐れのある記述が除去されるよう配慮する。

1961年と62年に開かれたドイツとフランスの教科書会議の合意事項の主たるものを以下に挙げる。

- ドイツの教科書には第三共和制について触れていないか、或いは触れても付随的なものにすぎないものがあることへの勧告
- ワイマル共和国を、ナチスの政権獲得に至る不可避的前段階としてだけでなく、新しい政治構造のなかにおける独自の一政体として、また社会民主制、1848年の革命とビスマルク時代の継承者として記述する。
- ワイマル体制には民族主義という特殊要素が含まれており、そこに隠された犯罪的な意味を戦前の諸外国は見落としていた。
- ナチス政府が行った人種絶滅とテロル、拷問について、また人間性を奪い最終的には根こそぎにしていた様子について正確に教えることが不可欠である。
- ヒトラー体制下の残虐な光景を、その恐怖を軽減することなく生徒に提示することを恐れてはならない。なお、教師に対しては、生徒の年齢と感受性を考慮に入れて授業を行うことが求められる。⁵⁸⁾

しかし、フランスとの「解毒」が政治面、外交面、教育面、青少年交流でも順調に進んだのと比較すると、ドイツが多大の苦しみをもたらしたポーランドとは鉄のカーテンに隔たれていた。1972年の社会民主党のブランド政権下でのユネスコ支援による初の両国の歴史家対話まで待たねばならなかった。そのことに関してはポーランド人の言説を傾聴しよう。

この年（1972年）に（ドイツ・ポーランド教科書委員会）が発足したのは偶然ではない。第一に、人々が戦争の精神的外傷を癒すのに長い時間を要したこと。第二に、政治上の問題があった。つまりドイツ連邦共和国政府が、ポーランドでナチスの行った犯罪行為を正面から見つめ、そこからしかるべき結論を導き出す姿勢（ブランド首相、シェール外相の東方政策、及びポーランド人民共和国・ドイツ連邦共和国国交正常化条約）をとるまでは、ドイツとポーランドの歴史家が共同の教科書作業をおこなうことなどありえなかったのだ。

1972年、両国のユネスコ委員会の傘下に教科書委員会を誕生させることを思いついた政治家が誰なのかは分からない。だがここで重要なのは、このような政治家が双方とも同時期に存在したということ、これからはじまる学者たちの作業を保護するために名望ある国際機関の権威が意図的に利用されたということである。これは発足当初からきわめて政治色の濃い作業だったのだ。さて、この与えられた舞台をどう使うかは学者たち次第だった。⁵⁹⁾

しかし、この回想を行った歴史家でワルシャワ大学副学長のウラジミール・ボロジエイ（1979年から1981年まで委員会の書記長）は「逆の定義をすれば、教科書委員会の政治的課題は1945年から1970年において政治が欲しなかった和解への模索にあった。」と述べている。また、当時の委員会のドイツ側代表ヴァルター・メルティネ（元突撃隊員、フレンスブルグ教育大学教授）とポーランド側代表ウラジスラフ・マルキビッチ（強制収容所生還者、社会学教授、ポーランド学術社会学アカデミー書記長）というような全く経歴の異なる人物を含む委員会が何故存続できたのかについても、彼らの「事柄への真剣さ」と「その時点で何が可能かに対する優れた感覚」、「忍耐」、「相互信頼」、「ユーモア」のお蔭であったと述懐している。ちなみに委員会の会議はドイツ語で行われた点にポーランド側の積極的な協力姿勢が伺える。

さてドイツーポーランド教科書委員会は年2回の会合を経て、1976年に26項目からなる「ドイツ連邦共和国とポーランド人民共和国の歴史と地理の教科書に対する勧告」を作成した。勧告対象は「古代と初期中世におけるスラブ人とゲルマン人」に始まり、No.19「1933－1999年のドイツ・ポーランド関係」、そしてNo.26「正常化への道」に及び、1000年以上にもわたる時代を対象としている。その記述において特徴的な傾向は、統一的学説が存在していない時には、仮説しか存在しないこと、仮説を超える資料がある場合でも学説の統一がない場合には、視点の多様性を紹介するようにとの勧告である。例えば、「古代と初期中世におけるスラブ人とゲルマン人」にはこう記されている。

勧告1. 大インド・ヨーロッパ語族の成立、とりわけゲルマン人とスラブ人に関して、その発祥の地と移動並びに東ゲルマン人の拡大については種々の仮説があり、教科書においては仮説として記されるべきである。東ゲルマン人がドイツ人の祖先でないことは確かである。中世ヨーロッパの文化圏は、地中海キリスト教文化、ゲルマン文化、スラブ文化が融合して成立したものである。⁶⁰⁾

ちなみに、近藤孝弘はドイツの歴史学者マイヤーに依拠しつつこの勧告の意義をこう解釈している。

マイヤーによると、東ゲルマン人をドイツ人の祖先と見る歴史解釈は1918年以降に、つまりドイツが第一次世界大戦の敗戦にともなって、新たに独立を達成したポーランドに東部領土を譲らざるをえなくなったのちに、宣伝用に作られたものであるという。すなわち、それらの地域は、本来ポーランド人の祖先であるスラブ人が住んでいたところに中世以来、ドイツ人のいわゆる東方殖民が行われ、その後の種々の経緯を経て1918年を迎えた——真の所有者に戻ったのではなく、本来は「ドイツ人の祖先である東ゲルマン人」の土地であったとすることにより、新しくひかれた国境線の「修正」を要求する根拠としたのである。（・・・）こうした経緯には、ナショナリズムという原理が国民国家にたいして（ドイツだけでなく、ポーランドにもあてはまるのだが）、単に領土の拡大を促したのではなく、領土の拡大を正当化する「歴史」理解をも発明させた様子を認めることができる。ドイツ史やポーランド史といった国家名を冠した歴史記述の体系を発明したこと自体がナショナリズムの業績であるだけでなく、細部にまでその影響は浸透しているのである。⁶¹⁾

勧告6.「ポーランドとドイツ騎士団」

ポーランドの学校教科書では何よりも騎士団の世俗国家的かつ軍事拡大的役割が前面に出されている。西ドイツではその文明と宣教の任務が強調されている。

この実情に反映されているのは主として根本的に、また部分的に論争されているところのドイツ騎士団の評価である。このことは従って、今後、以下に記す騎士団の歴史の本質的事実の扱いにおいて留意されねばならない。

I. 13世紀（・・・）8）16世紀, 1525年:「世俗化と封土摂取」

これらの一連の問題は、1974年秋のツローンでの会議においてある程度の進展をみたが、さらに徹底した作業を必要とする。⁶²⁾

このドイツ騎士団をめぐるテーマはナチズムの問題と並んで対話の核心のひとつとなっていた。つまり、「騎士団によってキリスト教と文明が東方にもたらされた」という西から東への文明伝播的解釈は「西高東低」の意識と密接に結びついてきたからであり、既に1919年のヴェルサイユ条約会議においてポーランド全権団がドイツに対してこの「ドイツによるポーランドの文明化」という歴史認識を反駁したものであった。

勧告19.「1933－1999年のドイツ・ポーランド関係」

1930年から1932年のドイツの対ポーランド政策は、国境の修正主義の先鋭化そのものであり、他方でポーランド政府は、世界経済の危機の結果として高まりつつあったナチズムの性格について、またヒトラーが政権を握ったことがドイツの外交政策に与える影響について判断を誤った。

1934年のドイツ・ポーランド不可侵宣言は「友好条約」ではなかった。この宣言に署名したナチ政府は、これによって自らをヨーロッパにおける「秩序維持者」、「平和の創造者」であると宣伝する口実を得た。ポーランド側は、この宣言によってドイツと密接な関係を結び、ドイツが西欧諸国と提携してポーランドを脅かすことのないよう期待していた。ポーランド側のもう一つの動機は、この宣言によってソ連が西欧諸国と結ぶ道をふさぐことであった。

ヒトラーは、ポーランドの衛星国化に失敗したので、1939年に、戦争による解決を決定した。「ダンツィヒ問題」は、彼にとって口実にすぎない。このような状況の下でポーランドは、自国の独立を放棄するか、武力で抵抗するかを選択を迫られた。⁶³⁾

ドイツの歴史家にとっては自国の過去の外交政策の詐欺師的本質を教科書に記述することには心苦しいものがあつたであろう、しかしそれ以上にポーランドの歴史家にとっては過去の自国の政府がこのような詐欺師に騙されていった事実を知らしめるにあたり、犠牲となった数百万の死者への追憶に伴う言い知れない悲哀が伴ったことであろう。さらに、この勧告には「独ソ不可侵条約」への言及やソ連による大量のポーランド将校粛清、いわゆる「カチンの森の虐殺事件」に触れていないが、これは近藤氏が正しく指摘するように、ソビエトとポーランドの関係を配慮するドイツ側の暗黙の了解であり、このことに触れることによ

り共産主義政府の介入によって対話を挫折させるよりは、継続しようとの強い意志の現われであると解釈したい。

勧告20.「第二次世界大戦中のナチスの占領政策と抵抗」

第二次世界大戦を扱うに際しては、ナチスの占領政策と、それがポーランド国民にもたらした結果が十分に描かれるべきである。また、ヒトラー体制が目指したのが、単にポーランド国家の抹殺にとどまらず、ポーランド知識人と文化の根絶、ポーランド国民の抑圧、そしてポーランドの植民地化にあったということが明確にされねばならない。この事実、そしてポーランド国家の存続を象徴したポーランド軍隊の戦い、またポーランドの抵抗運動、とりわけワルシャワ・ゲットーの反乱とワルシャワ蜂起が評価されるべきである。ポーランドの教科書で、ドイツ人と「ヒトラー・ファシスト」が区別されているのは喜ばしいことであり、ドイツの抵抗運動もポーランドのそれと同様に偉大なヨーロッパの抵抗運動の一部として、いっそう詳細にとりあげられることが望ましい。勧告19, 20を補充するため、1933-1945年のドイツ・ポーランド関係の多くの困難な問題に関して、1977年から共同の会議とシンポジウムが予定されている。⁶⁴⁾

それでは、この勧告が現在のドイツの歴史教科書にどのように反映されているかを見てみよう。筆者が手にしているのはベルリンのギムナジウム高学年用（17, 18, 19才用）であるが、タイトルは『歴史 政治と社会』2巻であり、その第一部がフランス革命から第二次世界大戦を扱っており、388頁のうち305から388頁までがナチス時代にあてられている。そのなかで「ドイツの占領政策」という小見出しで続く箇所には数頁にわたって、ドイツでの占領政策が生々しく記述されている。

東部占領地域における占領政策は住民全体の服従と征服した地域の経済的搾取を目的としていた。将来のドイツの生活圏と看做されていた東ヨーロッパは「ゲルマン化」されるべきであるとされた。ポーランドとソビエトの指導者層の物理的根絶、ユダヤ人のゲットーへの集積、絶滅収容所におけるユダヤ人の大量殺戮が東部における占領政策を特色づけていた。これにはSSの特別投入部隊だけではなく、正規国防軍も関与していた。

移住-絶滅-搾取政策はかつてないほどのパルチザン活動を引き起こしたが、それは（鎮圧のための）大規模の部隊の投入を引き起こし、人的損失の痛みを伴った。戦争によってそれに巻き込まれた全ての国々の民間人に多大の苦痛がもたらされた。⁶⁵⁾

この教科書においては、ワルシャワ蜂起が具体名で表記されていない点を除けば、勧告が殆ど反映されている。さらには、戦争犯罪をナチスにのみ帰せずに、ユダヤ人大虐殺やポーランドやソビエトの指導者層の絶滅にはSSだけではなく、正規軍も関与していたとして、いわゆる普通のドイツ人の関与をも示唆している。この正規軍の関与の発覚ということは、ドイツでは最近のきわめてセンセーショナルな出来事であった。その背景には戦後直後か

ら、ドイツの戦争犯罪をナチスにのみ覆いかぶせてしまうという傾向が生まれ、それが戦後60年間ドイツの暗黙の了解になっていたことがある。戦闘経験者の大半を占めた正規軍の兵士としての参加であれば、命令もしくは国土防衛であったとの正当化がなされるからであった。しかし、ハンブルク社会研究所が1999年から行ったドイツ国内を巡回した「ドイツ国防軍犯罪展」⁶⁶⁾はこうした最後の弁解口実をも破砕してしまうものとして、ドイツ全土で物議を醸しだした。これに対する抗議集会さえもおきたほどである。歴史の見直しが今でもどれほどの傷をもたらすかの例証である。

最後に、イスラエルとの教科書対話を見てみよう。ドイツがイスラエルとの教科書対話を始める前に、既にドイツ・フランス教科書対話においてホロコーストの事実を記述すべきとの勧告は出ていた。しかし、イスラエルとの対話においては、ショアーの事実と並んで中世以来のヨーロッパ史、ドイツ史におけるユダヤ人の存在、偏見、反ユダヤ主義の系譜に関する記述の修正について議論がなされた。さらには、ユダヤ教がキリスト教に与えた意味、イスラム成立過程でのユダヤ教の存在などに関するドイツの教科書での言及が勧告された。ドイツ・イスラエル教科書対話へむけての研究の課題は、下記の4項目の記述に関して 1) 記述されていない 2) 非連続性 3) ゆがみ 4) 事実相違 の検証からスタートした。

- a) ドイツ連邦共和国の教科書における古代ユダヤ人の記述について
- b) 両国の歴史教科書における中世から近世までのドイツ史並びにドイツ・ユダヤ関係史の記述について
- c) 両国の歴史教科書における啓蒙主義時代から第2次大戦終結までのドイツ史並びにドイツ・ユダヤ関係史の記述について
- d) イスラエルの教科書におけるドイツ連邦共和国の記述並びにドイツ連邦共和国の教科書におけるイスラエル国家の記述について⁶⁷⁾

このような研究と討議に基づいて両国の教科書に対して1985年にそれぞれ13の勧告がなされたのであるが、本稿ではドイツの教科書への勧告の数例を紹介する。

ドイツ連邦共和国の歴史教科書におけるユダヤ人の、とりわけドイツ系ユダヤ人の歴史の取り扱いに対する勧告

1. 十字軍からペストの時代、ルターの反ユダヤ論争からシュテッカーやトライチケなどの歴史家の反ユダヤ主義、帝政後期並びにワイマール共和国時代の民族主義的人種主義、国家社会主義時代の駆逐と大量殺人にいたるまで、専らユダヤ人をその対象並びに犠牲として登場させることは避けられるべきである。学校教科書においてはユダヤ人の生活とユダヤ文化との関連にも認識をむける試みが推奨される。さらには、ユダヤ人と非ユダヤ人が比較的問題なく平和に共生・並存していた時代にも今以上に比重をかけるべきである。
2. ユダヤ教の宗教史的意義に関する、簡潔な叙述（一神教、ユダヤ教とキリスト教の関係、イスラムに

対するユダヤ教の意義)は古代並びに中世史において欠如してはならない。この関連において、ヨーロッパ文化の発展に対するユダヤ教の意義を説明することができよう。⁶⁸⁾

13の勧告のなかで、とりわけ勧告の9と13においてはナチスによる人類史上比類の無いジェノサイドの実態だけでなく、それにいたる過程(ユダヤ人の法的権利の剥奪、社会的差別、社会からの絶縁、追放)などが例証をあげて示されるべきであると勧告している。さらにはこのことに対する責任及び共同責任が問われ、生徒達によるその問いに対する返答を導き出す試みも避けられるべきではないと勧告している。

勧告9.

国家社会主義のイデオロギーにおける反ユダヤ主義が占めていた中心的な立場ならびに「第三帝国」の政治に対して持っていた意味は強調されるべきである。1933年からシステムの大量殺人の開始にいたるまでのドイツにおける反ユダヤ主義的政策は決して付随的にあつかわれてはならない。ユダヤ人の権利の剥奪、公共的迫害、社会的絶縁、追放は選択された具体例によって示されねばならない、それによって国家社会主義のドイツにおいてはホロコーストが始まる以前に公衆の面前で何が生じていたのか、しかも一握りのプロテストや僅かな援助を提供する試みがなされたにすぎなかったことを生徒たちが学ぶために。国家社会主義者達によって計画され、恐ろしい規模において実行されたヨーロッパのユダヤ人へのジェノサイドに関しては、踏み込んだ、正確な情報提供を行う記述が必要とされる。そのことによって生徒達に行政的かつ技術的システムのバックアップを受けて実行された出来事の唯一無比性を把握する可能性を与える。それゆえに、重要なのは専ら加害者とその残された文書のみから記述することではなく、犠牲者の体験が少なくとも個々のケースにおいて表現されることである。ユダヤ人迫害と民族殺戮に対する責任と共同責任への問いかけがなされるべきであろう、またそれに対する生徒の返答を引き出す努力は避けられるべきではない。⁶⁹⁾

勧告13.

ユダヤ史、ドイツ・ユダヤ史の記述——反ユダヤ主義及びユダヤ人大量殺戮の歴史をも含めて——にあたっては特定の概念を取り扱う際に細心の入念さが要求される。反ユダヤ主義的ならびに国家社会主義的用語を無批判に使用することは絶対に避けなければならない。それらが使用される場合にあって、それらは距離を持って、引用符でくくって、それらが引用されていることをはっきりとさせねばならない。文献でしばしば現れる「ユダヤ人問題」(Judenfrage)という概念的表現は19世紀と20世紀の歴史に対しては避けられるべきであろう、なぜならそこでは実際のところ「反ユダヤ主義問題」(Antisemitenfrage)が扱われているからである。この関連において「人種」(Rasse)という概念もやむをえなく使用する場合に、そして「人種に関する学説」や「人種理論」などといった概念に対して、それらが不当にも要求した学術的性格を無条件に認めない場合において、引用符付でのみ使用されうる。また、ユダヤ人は人種上(引用符抜き!)の理由ではなく、人種主義的な理由によって迫害されたのである。「半ユダヤ人」、「四分の一ユダヤ人」、「生粋ユダヤ人」、「混血」などといった語は、そもそも使用されねばならない場合には、引用符によって国家社会主義の言語であることを明らかにされねばならない。「最終解決」という概念も国家社会主義的用語としてのみ導入されうる。理由は、無批判的に距離を取らずに(この概念を)受け継いでしまうならば、(当時)何かが解決されねばならなかったというような暗黙の了解を言葉の内に含ませてしまうからである。出来る限り品

位のある概念によって、反ユダヤ主義と国家社会主義の犯罪を言語的に無害化しようとする傾向に繰り返し、繰り返し、歯止めをかけねばならない。さらに要求されることは以下のことである。すなわち、様々な時代におけるユダヤ人という概念規定、宗教・文化共同体、さらには民族・国民としてのユダヤ人共同体に関する表記の言語使用が曖昧になり、それが拡散することに対して、自らの言語使用を正確に保ち、必要に応じでは直接解説を加えることによって歯止めをかけること。⁷⁰⁾

前出のギムナジウム高学年用の教科書『歴史 政治と社会』ではこの勧告はどう反映されているだろうか。この教科書では「ユダヤ人への迫害とユダヤ人の大量殺戮」という見出しで、資料も含めて3頁が割かれている。ここでは殺害されたユダヤ人の数を記すだけでなく、当時の帝国鉄道が輸送に協力したこと、さらには無数の組織や人々が間接的に犯罪に手を貸したこと、この協力がなければ「最終解決」の実現は不可能であったろうとの見解を示している。さらには「犯罪の技術的・官僚的組織が責任を分担し、『目をそらすこと』を可能にした」とドイツ人の共同責任にまで踏み込んでいる。参考資料としては、当時のユダヤ人のボイコットの模様を伝えるドキュメントや、いわゆる「ニュールンベルク法」(1935年9月15日の『ドイツ人の血と婚姻保護のための法』)の抜粋、1942年の「ユダヤ人問題最終解決」のための「ヴァンゼー会議」の要点の抜粋、そして当時のドイツ人が強制収容所とユダヤ人の運命について目を閉じ、耳をふさいでいた実情を伝える大学教授の回想が掲載されている。そして、学習者には次のようなディスカッションのテーマが与えられている。

1. 資料34と資料35を参考にナチス政権のユダヤ人政策の根本姿勢について述べなさい。
2. ドイツにおける(ヒトラー以前の)反ユダヤ主義の歴史を調べなさい。(州立図書館など)
3. 資料36を基に、あなたなら、ナチス政権下で、ユダヤ人への犯罪行為に関する情報に関してどのように振舞ったであろうかについてディスカッションを行ってください。⁷¹⁾

さらに、この教科書は精神障害者や身体障害者、エホバの証人、同性愛者の殺害といったナチスが行ったドイツ人への犯罪、そしてジプシーの人々の殺害にも言及しており、精神障害者に対して成された殺害が「安楽死=Euthanasie」(ギリシャ語で「美しい死」)と呼ばれていたが、現在の安楽死とは全く異なる、生命の抹殺であったことに注意を喚起している。⁷²⁾

勧告の13はきわめて重要な勧告である。このことを真摯に受け止めていれば連邦議会議長を辞任せずに済んだであろうCDUの政治家がいる。それはイエニンガーである。

1988年の彼の演説について保守系新聞FAZは次のような記事を掲載した。「1988年11月10日連邦議会議長フィリップ・イエニンガーは連邦議会において、ポグロム50周年に際して、追憶演説を行った。式典の時はセンセーションで終わった。演説の途中に、ざわめきが起った。ついにはSPDや緑の党の多くの議員と並んでFDPの幾人かの議員も議場を去っ

た。』⁷³⁾ 勧告書の19は見事にイエニンガーの失敗を予め警告していたのだ。彼はナチスの用語をそのまま多数使用した。引用文においてであったが、聴衆にとっては彼が語っているのか当時のナチの言説なのか、はっきりとしないのが原因で不満と怒りが高まっていったのだ。招待されていたユダヤ人協会の女性はイエニンガーが語る引用文の内容にショックを受け、泣き出す始末であった。

VI) 戦争責任を巡る多国間対話の意義

本稿の最後に現在の日本に目を転じてみる。確かにヒールシャーも認めたように日本には規模と方法においてホロコーストに匹敵するような犯罪行為は無かった。南京虐殺に関して被害者の正確な数に関しては日本と中国との間でいまだに大きな事実認識のずれがある。『レイプ・オブ・ザ・ナンキン』の著者としてアメリカで精力的に日本の犯罪行為を批判し続けている中国系アメリカ人作家アイリス・チャンの支持者達の扇情的な感情的ナショナリズムの巻き起こし方に対しては、アメリカのジャーナリストのチャールズ・バレスも、「戦争の傷を癒し究極的な和解をもたらす」という大義名分には理解を示しているが、彼らの持ち出すショッキングな写真のうち一部が「偽物であることが判明した。」として、その全体の厳密な史実的客観性を疑っている。⁷⁴⁾ しかし、数字の認定に固執し、犯罪行為そのものを殆ど認めない日本の保守主義者の態度に対して中国や朝鮮半島の人々が憤りを覚えていることは事実であり、「侵略」を「進出」と書き換えるように指導した1982年の教科書検定問題への猛烈な抗議は、日本人の「歴史への感受性の欠如」に対する怒りなのである。さらに、日本では戦争の悲惨さを伝える、あるいは原爆の悲惨さを伝える展示は多数あるが、加害者としての展示は最近になるまで皆無であった。1995年に広島県の福山に日本の新興キリスト教団が「ホロコースト博物館」を開設し、アンネ・フランクの写真等を展示したが、当時の在大阪のドイツ総領事が、「ドイツの戦争犯罪は認めるが、日本は自国の戦争犯罪をも並列して展示すべきではないかと」の手紙を送った件が、TVで取り上げられた事件があった。ちょうど戦後50周年を記念してヴァイツゼッカー元大統領の講演来日中ということもあって、ドイツ大使館はこのことに極度に神経を使ったが、事件は意外な結末へと向かった。TV局がFAXで意見を募集したところ、このTVニュースを見た、在大阪の中国人や韓国人のかなりの数の人々がこのドイツ総領事の発言を支持したのであった。⁷⁵⁾ 総領事の発言を当初批判したのは日本人だけであったという事実はどう解釈すべきであろうか。中国人や韓国人が戦後ドイツの過去との取り組みに関する知識をどれほど持ち合わせていたかということは全く問題ではない。日本では、過去との取り組みが積極的に行われていないにもかかわらず、ドイツの戦争犯罪のみをクローズアップしている日本の新興キリスト教団と報道へのアジア近隣同胞からの憤りが圧倒的であったという事実を我々は真摯に受け止めなければならない。このことこそは、従来までは、専ら日本国民自身の課題と考えられてきた

「過去との取り組み」が、グローバルな多元化社会においては、多元的な視点で眺められるようになってきていることの明白な証左と看做されねばならない。このドイツ総領事の発言は日本においても「過去の戦争犯罪」が自国にいる「非日本人の視点」からも発言されるような多元化社会が生まれてきたことの明白な証左であり、歴史記述においてこのような「他者の視点」を取り入れずには、歴史の共有認識が可能にはならないという事実を我々は真摯に受け止めねばならないのではなからうか。ここで先に紹介したヘプケン教授の言説を思い起こしてみよう。彼は、歴史学のパラダイム転換が歴史の教授法に与えた影響について、「新たな教科書研究の根本的評価基準となったのは、教科書が他者の視点をも伝えること、生徒にそれを認識し理解する能力を身につけさせること、そして生徒に歴史の多義性を理解させることである」と述べているからである。

しかしながら、日本の新保守主義者達にあっては、「国民教育の番人」を目指すという点ではドイツの保守主義者と共通しているが、アジアにおける過去の犯罪の存在について理性的な検証を最初から拒絶していることがドイツとの大きな相違であろう。こうした姿勢が日本の外ではどのように受け止められるかについて彼らは関心を示さない。オランダ人作家イアン・ブルマはアメリカでセンセーショナルになった南京虐殺に関する日本人の対応を次のように報告している。

こうしたアメリカ国内での議論に対する日本の反応の問題点は、それが往々にして余りにぶざまな弁護であることです。こういう問題に論駁するのは、まちがった人選によって派遣される人たちです。気の毒な日本大使はテレビでアイリス・チャンと論争しなければなりません。本国政府の外交路線を弁護せねばならない官僚の姿は、欧米のテレビ視聴者の目には守勢に映り、全く正直に見えません。ヒロシマやベトナムを持ち出し、事件は人が言うほど悲惨なものではなかったと述べることで、日本側論者は過去を相対化しようという印象を与えてしまいます。こういうアプローチでは事実にもとづいた理性的、歴史的論争に至ることはできません。

日本人がいかに戦争に対応したかという、パネリストの報告もありましたが、私は賛成できません。(・・・) 彼が描いてみせてくれたことは、いささかバラ色にすぎるとは思いません。確かに日本人によって戦争に関するたくさんの本が書かれてきました。しかし日本のメディア、テレビ、映画は議論の対象となっている問題、事態がこじれそうな問題に及び腰でした。南京事件のような問題について、プロの歴史家が公開の論議に取り組んだのはごく最近になってからのことです。歴史家たちはこういう問題を避けようとしてきました。発言するのは評論家や特定の政治的立場に立つジャーナリストばかりでした。ですから議論はいつでも政治的であり、論争のための論争であり、事実の理性的検証からははるかに隔たったものでした。⁷⁶⁾

阿部猛は『太平洋戦争と歴史学』の中で、「戦争責任論で特徴的と思われるのは、軍部の責任を東条英機に負わせ、文学者のそれは高村光太郎に、そして歴史家の責任は平泉澄に負わせる、つまりスケープゴートをつくりあげることによって、他の責任を曖昧にする手法であった。研究者は社会的存在であり、その研究の成果が社会へ還元されるべきものである限り、いかなる形においても『社会的責任』をまぬがれない。その意味において、とくに『戦

争』にかかわって歴史学研究者がどのような姿勢をとったかを明らかにすることは大切である。責任を明らかにするためには『事実』を明らかにする必要がある。』⁷⁷⁾と述べ、「歴史研究者が、みずからの姿勢を正さなければ、政治家・軍部・財界などの戦争責任を追及しても迫力を欠くことになるだろう。』⁷⁸⁾と語っているが。戦争の体験者が益々歴史の表舞台から消えて行き、彼らの記憶が消失していく中で、日本の歴史家の急務はアジアの歴史家とナショナリズムや政治体制の枠を超えて、歴史的「事実 = Sache」の確認作業を行うことであろう。犯罪の規模をめぐる不毛な論戦を日本人同士で続けるかわりに、まずは事実の存在を国際的共同作業ですすめることが必要である。1995年のドイツ総領事の発言とそれに対する在阪の中国・韓国の人々の反応は日本の過去の犯罪について多国間対話が必要不可欠になってきたことの印である。それは日本の社会がマイナリティーである外国人にも開かれた社会になるために必要不可欠の作業である。明治以降、常に「東京」という中心から沖縄、アイヌという周辺への圧力と支配を朝鮮半島、台湾、中国大陸、そして東南アジアへと拡大していった日本の近代の歴史を語るにおいてこれら「非日本人」という「他者」の視点を排除して日本の歴史は正確な姿をつかめないであろう。

日本の過去との取り組みにとって、三島憲一は「日本の自己弁護や赦免に向かわない形で議論する知的可能性」の重要性を強調し、「ドイツよりも長い期間戦争をし、ドイツよりも長い苦悩を周辺諸国に引き起こした日本の戦争責任を生活形式の点でいぜんとして引きずっている日本の現状を考えるため」⁷⁹⁾に必要であるとの判断を示している。今の日本の歴史研究に求められているのは、自国史中心の「国民の物語」を創造することではなく、アジアの過去へ向かい未来を獲得しようという決意、つまり戦争の犠牲者とその子孫達と歴史を共有する可能性をさぐることではないだろうか。ゲオルク・エックハート研究所がフランス・ポーランド・イスラエルとの対話を成立させた背景と状況は日本のそれとは全く異なっている。しかしながら歴史家達が1000年を超える時間を相手に歴史的事実を検証し、相互の偏見を克服して取り組んだ粘り強い知的努力に敬意を表したい。

さらには、ドイツに比べて、戦後責任という問いが社会の中で積極的に取り上げられる機会の少ない日本における戦後生まれの世代と戦争の過去との関係について、加藤周一が『戦争責任の受けとめかた』の中で行った次のような指摘も忘れることはできないであろう。

戦時下のさまざまな犯罪は、あるいは戦争自体は、日本の社会、文化が生み出したものです。一定の社会的文化的状態が、つまり、社会構造のありかたとか経済的条件とか、文化的伝統とか、心理状態とか、戦争と戦争犯罪を生んだ。南京虐殺を例にとってみれば、これは任意の人間が真空中で行った事件ではない。具体的な日本人の集団が行った事件です。その行動は、日本の社会と文化によって非常に強く条件付けられている。このような集団犯罪は、現場で直接に手を下す人間と、彼らの行動を条件付けている日本の文化、社会との共同作業です。これを中国人の立場からみると、問題ははっきりする。南京虐殺をいま謝罪してもらっても、死んだ人はかえらない。問題はこの虐殺を生み出した日本の社会構造や文化や、メンタリティが

どうなったかということです。これがそのままだと、中国人としては心配せざるをえない。しかも経済力や軍事力が次第に大きくなっていく。中国人としてはすこぶる気持ちが悪い。1945年以来、たしかに日本の歴史的社会的文化的条件は大いに変わりました。しかし、まったく変わったわけではない。問題は何が変わり、何が持続しているかということです。南京虐殺を生み出した社会的文化的条件からの離別、戦前の日本社会との断絶に、だれが努力しているか、だれがそうしようとしているか、ということです。それはいまの日本人全体の問題です。男女に関係なく、年齢に関係ない。(・・・) 残念ながら戦後の日本では、嘗ての日本の社会的文化的条件を突き崩してゆこうとする実際の作業や努力がない。すくなくともそれはきわめて希薄です。そしてこのことにこそ、日本人全体の責任がある。そのとき、これに関心で手をこまねいていれば、そこに責任が生じる。(傍線 筆者)⁸⁰⁾

加藤のこの指摘を1985年の議会演説でヴァイツゼッカー元大統領の演説が若い世代に訴えた次の箇所と関連して再考してみよう。

我々全員は罪の有無、年齢の老若に関係なく過去を受け入れねばなりません。我々は全員そこから生じたものにかかわっており、それに対して責任を負っています。若い人も年長者もなぜ記憶をはっきりとさせておくことが人生にとって重要なのかを互いに助けあって理解せねばなりません、また、出来るはずです。それは過去を克服することではありません。そんなことは全く出来ません。過去は後から変更されるものではありませんし、それが起こらなかったことにすることも出来ません。しかし、過去に対して目を閉ざすものは、現在に対しても盲目となります。非人間的なことを記憶に留めようとしない者は新たな感染の危険に対しても脆い者となります。⁸¹⁾

ヴァイツゼッカーの演説は最後に若者へのメッセージで終わるが、この演説の背景にある若者へのメッセージが内包しているものは何であろうか。筆者が留学していた1982年から1984年の間でも、ドイツ人の若者の一部はナチズムの犯罪を学校で繰り返し徹底して学ばされたために、ドイツ人としての罪責感や自己嫌悪が発端となって、ドイツの歴史・文化へのアイデンティティーの喪失に陥るだけでなく、そのアンビバレントな苦しみからの防御手段として過去を否定し、ヒットラーの遺産であるアウトバーンや全体主義を礼賛する若者の存在を見聞することがあった。この演説はそうした問題をも意識して次のように締めくくられている。

若い人たちにお願いしたい。他の人々に対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないようにしていただきたい。ロシア人やアメリカ人、ユダヤ人やトルコ人、アールタナティープを唱える人々や保守主義者、黒人や白人、これらの人々に対する敵意や憎悪に駆り立てられることのないようにしていただきたい。民主的に選ばれた我々政治家にもこのことを肝に銘じさせてくれる諸君であって欲しい。そして範を示して欲しい。自由を尊重しよう。平和のために尽力しよう。公正をよりどころにしよう。正義については内面の規範に従おう。今日5月8日に際し、能う限り真実を直視しようではありませんか。⁸²⁾

ここには平和の建設の為の対話と行動に向けて、過去の真実を直視し、内面の苦悩に打克

ち、自己を超越させることによってドイツの未来を築いて欲しいという、政治的ビジョンを伴う具体的なメッセージを見てとることが出来る。ヴァイツゼッカーは過去を克服することは出来ないと言っている。しかし同時に彼は、過去を直視した上で、自分を超越していくことを、自分の中の狭義のナショナルなアイデンティティーを克服することを要求している。

ヴァイツゼッカーが上述のように語った時、そこには負の過去を直視することによって未来の課題に向き合っていく、負からの積極的な転換を同胞に呼びかけていることが聞き取れるのではなかろうか。⁸³⁾

戦後のドイツ基本法において死刑が廃止されたのも、第三帝国においてあまりにも簡単に法的に生命が抹殺されたことへの強い反省からであり、1949年制定されたドイツ基本法にはそのような暗黒の過去と非対称な人権を守る市民社会を打ちたてようという理念が盛り込まれている。ヤスパースが戦後すぐに大学生に語った「人間としての根源的生まれかわりという課題」をヴァイツゼッカーは40年の時を経て、よりグローバルなフィールドをも視野に入れながら、若者に対して絶対的な悪である過去と対峙し、そこから「他者の苦悩を理解する」という自己克服を通じて「現在苦しんでいる人々との連帯・対話」の実現を要請している。

ハーバーマスが「連邦共和国における公式の自己理解に関しては、この点での答えは明解である。それはホイス大統領からハイネマン大統領の場合であれ、ヴァイツゼッカー大統領であれ同じである」と語ったさいに念頭においていたのは、このように決してナチズムを忘れることなく、憲法に保障された「人間の尊厳」を最重視する民主主義への信頼であり、彼はそれを「憲法愛国主義」と呼び、これのみが「我々を西側から離反させない唯一の愛国主義である」と宣言したのである。

しかしながら、「国民の物語」や「大きな物語」を描こうとする立場の人々からは、「人間の尊厳」を剥奪された他国の犠牲者達への眼差しが欠落してしまう。リベラルな立場の日本近代史研究においても、日露戦争までの時代を肯定的に解釈し、日露戦争以降の官僚、産業界、軍部、ポピュリズムを批判する研究は多い。帝国主義の時代にあって列強との生存競争に打克つことが明治政府の至上の政策であったという視点から日露戦争までを評価する立場である。しかし、このような国際政治上の背景を理解した上でも、昭和の軍部との比較のみにおいて「明るい明治」を評価し、日本に併合された朝鮮半島の人々が経験した悲哀と慟哭を無視することは出来ない。我々は彼らの視点をも自国史の中に統合していかなければならない。

(結び)

「未来を勝ちとるため、過去と向き合おう」とゲープハルト・ヒールシャーが我々に呼びかけてくれたのを思い出そう。我々が日本の未来を絶え間ない功利的成功と進歩の内にのみ

探し求め、アジアの戦争犠牲者の視点に目を向けることなく、彼らの全てが他界してしまうのを待ち続け、歴史からの存在忘却を巧妙に計画するならば、我々はベンヤミンのいう「進歩と言う強風」に吹き流され、ますます過去から不可抗力的に引き離され続け、歴史の中に、人間の悲哀と記憶の廃墟を増やしつづけることになるのではなかろうか。

参考文献

1. Karl Jaspers, *Die Schuldfrage*, Lambert Schneider, Heidelberg 1946
2. Theodor W. Adorno, *Negative Dialektik*, Suhrkamp Verlag F/M 1966
3. Max Horkheimer/Theodor W. Adorno, *Dialektik der Aufklärung*, Fischer Verlag F/M 1988
4. Alexander und Margarete Mitscherlich, *Die Unfähigkeit zu trauern: Grundlagen kollektiven Verhaltens*, R. Piper & Co. Verlag, München 1967
5. „Historikerstreit — Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung“, Piper Verlag, München 1987
6. „Empfehlungen für die Schulbücher der Geschichte und Geographie in der Bundesrepublik Deutschland und in der Volksrepublik Polen“, Schriftenreihe des Georg-Ecker-Instituts für Internationale Schulbuchforschung Band 22/XV, Erweiterte Neuauflage, Selbstverlag des Georg-Ecker-Instituts, Braunschweig 1995
7. „Deutsch-israelische Schulbuchempfehlungen-Zur Darstellung der jüdischen Geschichte sowie der Geschichte und Geographie Israels in Schulbüchern der Bundesrepublik Deutschland-Zur Darstellung der deutschen Geschichte und der Geographie der Bundesrepublik Deutschland in israelischen Schulbüchern“, Verlag Moritz Diesterweg F/M 1992, 2., erweiterte Auflage
8. „Internationale Verständigung, 25 Jahre Georg-Ecker-Institut für internationale Schulbuchforschung in Braunschweig“, Verlag Hahnsche Buchhandlung, Hannover 2000
9. „Geschichte, Politik und Gesellschaft 1, Von der französischen Revolution bis zum Ende des 2. Weltkrieges — Lern- und Arbeitsbuch für Geschichte in der gymnasialen Oberstufe —“, hrsg. von Wolfgang W. Mickel in Zusammenarbeit mit Thomas Berger, Udo Margedant, Frieder Mutschler und Petra Rentschler, Verlag Cornelsen, Berlin 1988, 3. Auflage
10. Walter Gehl, *Geschichte 5 Klasse, Oberschulen, Gymnasien und Oberschulen in Aufbauform* Verlag Ferdinand Hirtin Breslau, Königsplatz. 1942
11. „Unterrichtshilfen Geschichte Klasse 9“ Volkseigener Verlag Berlin 1982
12. Die Rede des Bundespräsidenten Richard von Weizsäcker am 08. 05. 1985.
<http://www.bundestag.de/info/parlhst/dok26.html>
13. Richard von Weizsäcker, *Vier Zeiten*, Seidler Verlag, Berlin 1997
14. Ilya Prigogine Isabelle Stengers, *La nouvelle alliance*, Édition Gallimard, 1979 pour le texte, 1986 pour la préface et les appendices
15. Susan Buck-Morss, *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project* (Cambridge: The MIT Press, 1989)
16. “Sharing the burden of the past — Legacies of war in Europe, America, and Asia —”, Edited by Andrew Horvat and Gebhard Hielscher, The Asian Foundation/Friedrich-Ebert-Stiftung, 2003, Japan
17. カール・ヤスパース『責罪論』橋本文夫訳 ヤスパース選集 理想社 1965年 ヤスパースの訳文引用に関しては本書を参考にした。

18. 丸山真男『現代政治の思想と行動』未来社 1964年
19. 亀井勝一郎『日本人の精神史』第6巻 文藝春秋 1967年
20. 白井吉見監修『戦後文学論争』上下巻 番町書房 1972年
21. 河上徹太郎・竹内好他『近代の超克』富山房文庫 1979年
22. イリヤ・プリゴジン, イザベル・スタンジェール共著『混沌からの秩序』伏見康治他訳 みすず書房 1987年
23. 加藤周一『戦争責任の受けとめかた：ドイツと日本』ブックレット『生きる』No.5 出版アドバンテージサーバー 1993年
24. J. ハーバーマス/E. ノルテ他著『過ぎ去ろうとしない過去 — ナチズムとドイツ歴史家論争 —』三島憲一他訳 人文書院 1995年
25. リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー『ヴァイツゼッカー回想録』永井清彦訳 岩波書店 1998年
26. 近藤孝弘『国際歴史教科書対話』中公新書 1998年
27. 小森陽一/高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会 1998年
28. 加藤周一『「戦争と知識人」を読む』凡人会 1999年
29. 高橋哲哉『戦後責任論』講談社 1999年
30. ヴォルフガング・ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論 — ドイツ「再」統一とナチズムの「過去」』増谷英樹他訳 未来社 1999年
31. 阿部猛『太平洋戦争と歴史学』吉川弘文館 1999年
32. 今村仁志著『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』岩波書店 2000年
33. 藤原帰一『戦争を記憶する — 広島・ホロコーストと現在』講談社現代新書 2001年
34. エーバーハルト・ブッシュ『カール・バルトと反ナチ闘争 — ユダヤ人問題を中心に —』雨宮栄一他訳 新教出版社 2002年

注

- 1) イリヤ・プリゴジン『混沌からの秩序』404頁。なお、原文はタルムードからの引用である。
- 2) ホーマン議員は演説の中で次のように述べている： Meine Damen und Herren, wir haben nun gesehen, wie stark und nachhaltig Juden die revolutionäre Bewegung in Rußland und mitteleuropäischen Staaten geprägt haben. Das hat auch den amerikanischen Präsidenten Woodrow Wilson 1919 zu der Einschätzung gebracht, die bolschewistische Bewegung sei „jüdisch geführt“. Mit einer gewissen Berechtigung könnte man im Hinblick auf die Millionen Toten dieser ersten Revolutionsphase nach der „Täterschaft“ des Juden fragen. Juden waren in großer Anzahl sowohl in der Führungsebene als auch bei den Tscheka-Erschießungskommandos aktiv. Daher könnte man Juden mit einiger Berechtigung als „Tätervolk“ bezeichnen. Das mag erschreckend klingen. Es würde aber der gleichen Logik folgen, mit der man Deutsche als Tätervolk bezeichnet.
- 3) Dan Diner, *Zwischen Aporie und Apologie. Über Grenzen der Historisierbarkeit des Nationalsozialismus*, in: ders. (Hrsg.), *Ist der Nationalsozialismus Geschichte?* S.62-73
- 4) ヴォルフガング・ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論 — ドイツ「再」統一とナチズムの「過去」』(以下『ドイツ戦争責任論』) 26-50頁
- 5) 『ヴァイツゼッカー回想録』の日本語版への序文 2頁
- 6) 『ドイツ戦争責任論』6頁
- 7) „Historikerstreit — Die Dokumentation der Kontroverse um die Einzigartigkeit der nationalsozialistischen Judenvernichtung“ (以下 „Historikerstreit“ と記す。引用ページは日本語版『過ぎ去ろうとしない過去』に

依拠した。) 202頁

- 8) „Historikerstreit“ 203頁
- 9) “Sharing the burden of the past — Legacies of war in Europe, America, and Asia —” (以下『歴史の共有に向けて』) 105頁
- 10) 『歴史の共有に向けて』V～VI頁
- 11) 同上 143頁
- 12) NHK ETV特集『ワイツゼッカー 戦後50年へのメッセージ』1995年8月放送
- 13) 『歴史の共有に向けて』144頁
- 14) 同上 122頁
- 15) ローマン・ヘアーツオーク元大統領演説 ドイツ連邦共和国大統領府ホームページ
http://www.bundespraesident.de/dokumente/Rede/ix_12003.htm
- 16) Präambel: Grundgesetz für die Bundesrepublik Deutschland 1949
- 17) Die Verfassung des Deutschen Reichs vom 11. August 1919
- 18) 岩波ブックレットNo.55『荒野の40年』35頁 ドイツ語原文はドイツ連邦議会ホームページ
<http://www.bundestag.de/info/parlhist/dok26.html>に掲載されている。
- 19) CDU ホームページ <http://www.cdu.de/>
- 20) ドイツ基本法第7条
 - (2) Die Erziehungsberechtigten haben das Recht, über die Teilnahme des Kindes am Religionsunterricht zu bestimmen.
 - (3) Der Religionsunterricht ist in den öffentlichen Schulen mit Ausnahme der bekenntnisfreien Schulen ordentliches Lehrfach. Unbeschadet des staatlichen Aufsichtsrechtes wird der Religionsunterricht in Übereinstimmung mit den Grundsätzen der Religionsgemeinschaften erteilt. Kein Lehrer darf gegen seinen Willen verpflichtet werden, Religionsunterricht zu erteilen.
- 21) バルメン神学宣言1934年 原文はドイツプロテスタント教会ホームページ
http://www.ekd.de/bekenntnisse/117_142.htmlに掲載されている。該当箇所の原文は下記の通りである。
 „Jesus Christus, wie er uns in der Heiligen Schrift bezeugt wird, ist das eine Wort Gottes, das wir zu hören, dem wir im Leben und im Sterben zu vertrauen und zu gehorchen haben. Wir verwerfen die falsche Lehre, als könne und müsse die Kirche als Quelle ihrer Verkündigung außer und neben diesem einen Worte Gottes auch noch andere Ereignisse und Mächte, Gestalten und Wahrheiten als Gottes Offenbarung anerkennen.“
- 22) Karl Jaspers „Die Schuldfrage“ Lambert Schneider, Heidelberg 1946, S.29
- 23) Karl Jaspers, S.31
- 24) Karl Jaspers, S.33
- 25) Karl Jaspers, S.58
- 26) Karl Jaspers, S.65
- 27) Karl Jaspers, S.64
- 28) Karl Jaspers, S.101
- 29) 『近代の超克』17頁 「現代精神に関する覚書」
- 30) これに関しては、『近大の超克』に収められた竹内好の論文に詳しい。
- 31) 『日本人の精神史』6巻 340頁
- 32) 同上 331頁
- 33) 加藤周一『「戦争と知識人」を読む』35頁
- 34) 丸山真男 65頁

- 35) 『日本人の精神史』 6 巻 329 頁
- 36) 加藤周一 『「戦争と知識人」を読む』 38 頁
- 37) 同上 39 頁
- 38) 『戦後文学論争』 下巻 331 頁
- 39) 同上 335 頁
- 40) „Historikerstreit“ 237 頁
- 41) 戦後文学論争 下巻 345 頁
- 42) 『日本人の精神史』 6 巻 368 頁
- 43) 同上 394 頁
- 44) 例えば歴史家のマイネッケは『ドイツの悲劇』の序で、「本書で行われているもろもろの考察もまた、断片的なものにすぎず、われわれの運命をいっそう深く理解しようとする試みのための、予備作業であるにすぎない。」と述べ、歴史学者として「解きたい謎と不幸な方向転換にとんでいる」ドイツの歴史の継続的解明を要請している。精神医学者のミッチャーリッヒ夫妻は、復興のさなかにあったドイツ人が過去を忘却しつつあることに警鐘を鳴らし、「ただ一度かぎりの想起というものの内容は、たとえそれがどれほど激しい感情を伴うものであったところでも、たやすく色あせてしまうものだ。だからこそ、内的な拮抗と批判的な徹底した思考の反復が、無意識的かつ本能的に働く忘却、否認、投射やその他の防衛機制による自己保護の力を克服するためには必要なのである。このような想起と徹底操作の治療的効果はわれわれの臨床の実践ではよく知られている。だが、政治的实践のなかでは、この知識はまだ知られていない。」とアデナウアー政権以降のドイツ人の健忘症を精神医学的に問題視している。参考までに原文を掲載しておく：der Inhalt einmüßigen Erinnerns, auch wenn es von heftigen Gefühlen begleitet ist, verblaßt rasch wieder. Deshalb sind Wiederholung innerer Auseinandersetzungen und kritisches Durchdenken notwendig, um die instinktiv und unbewußt arbeitenden Kräfte des Selbstschutzes im Vergessen, Verleugnen, Projizieren und ähnlichen Abwehrmechanismen zu überwinden. Die heilsame Wirkung solchen Erinnerns und Durcharbeitens ist uns aus der Klinischen Praxis wohlbekannt. In der politischen Praxis führt uns dieses Wissen noch keinen Schritt weiter. Alexander und Margarete Mitscherlich, S.24
- 45) „Historikerstreit“ 201 頁
- 46) Susan Buck-Morss, P.338
- 47) „Historikerstreit“ 202 頁
- 48) 同上 30, 38, 185 頁
- 49) 同上 158 頁 ホーマン議員はドレツガー引退後、彼の選挙区をそのまま引き継いでCDUの連邦議會議員となった。
- 50) „Historikerstreit“ 67 頁
- 51) 同上 67 頁
- 52) Theodor Adorno, *Prismen*, S.30
- 53) „Historikerstreit“ 200 頁
- 54) 『歴史の共有に向けて』 2 頁
- 55) 同上 3 頁
- 56) 近藤孝弘 10 頁
- 57) Walter Gehl, S.218
- 58) 『歴史の共有に向けて』 14 頁及びInternationale Verständigung, 25 Jahre Georg-Ecker-Institut, S.209
- 59) 『歴史の共有に向けて』 18-19 頁
- 60) Empfehlungen für die Schulbücher der Geschichte und Geographie in der Bundesrepublik Deutschland und in der

Volksrepublik, *Polen*, S.17 (以下『ドイツ・ポーランド教科書対話』)

- 61) 近藤孝弘 64頁
- 62) 『ドイツ・ポーランド教科書対話』 S.19
- 63) 同上 S.27
- 64) 同上 S.28
- 65) Geschichte, Politik und Gesellschaft 1, Von der französischen Revolution bis zum Ende des 2. Weltkrieges — Lern- und Arbeitsbuch für Geschichte in der gymnasialen Oberstufe — S.384 (以下「ドイツ・ギムナジウム教科書」)
- 66) この移動展のドイツ語表記は「Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944」敗戦50周年目の1995年4月ハンブルクを皮切りに、1999年までドイツとオーストリアの33都市で開催された。1997年のミュンヘン開催では1万5千人の反対デモも開催された。ドイツの連邦議会でもクローズアップして取り上げられ、賛否両論、自分達の親族の兵役経験も披露されて、真剣な議論と相互傾聴がなされた。出版物としては「Verbrechen der Wehrmacht. Dimensionen des Vernichtungskrieges 1941-1944 Ausstellungskatalog」、研究所については<http://www.his-online.de/index.htm>を参照。
- 67) Deutsch-israelische Schulbuchempfehlungen-Zur Darstellung der jüdischen Geschichte sowie der Geschichte und Geographie Israels in Schulbüchern der Bundesrepublik Deutschland-Zur Darstellung der deutschen Geschichte und der Geographie der Bundesrepublik Deutschland in israelischen Schulbüchern, S.13 (以下『ドイツ・イスラエル教科書対話』)
- 68) 『ドイツ・イスラエル教科書対話』 S.26
- 69) 『ドイツ・イスラエル教科書対話』 S.28
- 70) 『ドイツ・イスラエル教科書対話』 S.29
- 71) 「ドイツ・ギムナジウム教科書」 S.362
- 72) 「ドイツ・ギムナジウム教科書」 S.363
- 73) フランクフルター・アルゲマイネ紙 1988年11月11日
- 74) 『歴史の共有に向けて』 91頁
- 75) この件に関しては筆者がドイツ総領事館に勤務していた時に直接関わった事柄であり、讀賣テレビの「ニュース・スクランブル」で取り上げられた。
- 76) 『歴史の共有に向けて』 104頁
- 77) 阿部猛 3頁
- 78) 阿部猛 4頁
- 79) „Historikerstreit“ 257頁
- 80) 加藤周一『戦争責任の受けとめかた：ドイツと日本』 8頁
- 81) 原文を記載しておく。
 »Wir alle, ob schuldig oder nicht, ob alt oder jung, müssen die Vergangenheit annehmen. Wir alle sind von ihren Folgen betroffen und für sie in Haftung genommen. Jüngere und Ältere müssen und können sich gegenseitig helfen zu verstehen, warum es lebenswichtig ist, die Erinnerung wachzuhalten. Es geht nicht darum, Vergangenheit zu bewältigen. Das kann man gar nicht. Sie läßt sich ja nicht nachträglich ändern oder ungeschehen machen. Wer aber vor der Vergangenheit die Augen verschließt, wird blind für die Gegenwart. Wer sich der Unmenschlichkeit nicht erinnern will, der wird wieder anfällig für neue Ansteckungsgefahren.«
- 82) <http://www.bundestag.de/info/parlhst/dok26.html>
- 83) 拙論『異文化理解と外国語・外国文化研究』参照 甲南大学国際言語文化センター『言語と文化』第7号 148, 149頁